マダガスカル研究懇談会ニュースレター

SERASERA 55

2026.10.16発行

表紙の写真

ヘルメットオオハシモズ（*Euryceros prevostii*）

マダガスカル固有種。1 属 1 種。熱帯雨林に生息。ハトくらいの大きさでブルーの大きなくちばしが特徴。一夫一妻で繁殖し、肉食。

撮影年月：2015 年 9 月
撮影場所：マスアラ半島（Masoala Peninsula）

撮影者：Rija Sylvain RAKOTOSOA

目次

表紙の写真　ヘルメットオオハシモズ **1**

第 29 回懇談会（大会）

第 29 回総会報告 **3**

マダガスカル研究懇談会の今後に関するアンケートの結果について **5**

講演 1　マダガスカルにおけるカラナ Karana の経済活動とその歴史

－十二イマームシーア派コージャ Khoja を事例として－ **10**

講演 2　マダガスカル特産オオハシモズ類－私の研究史－ **17**

生きもの図鑑 34　コクレルシファカ **24**

Moi et Madagascar　vol.34 ..... **29**

女三人マダガスカル旅行記 **30**

初渡航のマダガスカルにおける調査－ゴキブリ類の観察と現地環境－ **36**

マダガスカル研究懇談会会則 **42**

第 30 回懇談会（大会）のご案内 **47**

原稿を募集しています **48**

2026 年度世話役・事務局・編集部・会計監事 **50**

奥付 **50**

第 29 回　総会報告

2026 年 3 月 28 日（土)、第 29 回マダガスカル研究懇談会が逗子文化プラザ 市民交流センターで開催され、現地 28 名（うち会員 22 名）およびオンライン大会 9 名（うち会員 8 名）の合計 37 名が参加しました。研究発表に引き続いて行われた総会には 25 名（うちオンライン 2 名）が参加し、以下の事項についての報告と審議がありました。

【2025 年度の活動】

2025 年度の懇談会（第 28 回大会）は、2025 年 3 月 29 日（土）に京都大学稲盛財団記念館で開催され、41 名（うち会員 31 名）が参加しました。総会出席者は 31 名でした。『マダガスカル研究懇談会ニュースレター SERASERA』は、52 号と 53 号の編集を行い、電子媒体で発行しました。2025 年 12 月 31 日の時点での会員数は 145 名でした（前年度から 5 名の増加)。

【2025 年度の決算報告】

2025 年度の収入は、利息 1,336 円、第 28 回大会の懇親会余剰分の寄付 3,991 円の計 5,327 円でした（第 28 回大会の参加費は徴収せず)。これに対し支出は、ホームページ運営費としてドメイン使用料 2,192 円とサーバー使用料 6,188 円で、合計は 8,380 円でした。この結果、当期収支は 3,053 円の支出超過となり、次年度への繰越金は、2024 年度の 1,033,581 円から、1,030,528 円に減少しました。

この収支決算は､2025 年度会計監事の杉本星子氏と平野智巳氏から｢適正｣との監査を受けました。これらの報告を受け、2025 年度の決算報告が総会で承認されました。

【2026 年度の予算案】

提出された 2026 年度予算案の収入は、大会参加費 20,000 円（対面参加費 1,000 円とし、参加人数を 20 名と見込む）です。また前年度繰越金は 1,030,528 円です。一方、各支出費目は、消耗品代 2,000 円（使用の見込みはないが前年度予算案を踏襲)、印刷費（大会資料の印刷等）5,000 円、ドメイン使用料 2,192 円、サーバー使用料 6,188 円、大会時の懇親会費補助金 20,000 円、旅費 92,825 円（大会発表者および大会補佐事務局員）の合計 128,205 円となります。この予算案は総会で承認されました。

【マダガスカル研究懇談会事務局員の交代】

2025 年度、2026 年度、2027 年度にかけて、事務局員が以下のように入れ替わることが報告されました。

2026年2月7日世話役会時点の情報

役割分担	内容	世話役	事務局	備考
■総務	・問い合わせ等対応	水田	各担当者	info@…にくるメールを水田がチェック、事務局に適宜指示
■会員管理	・入会手続き ・会員名簿管理 ・ML管理	市野	篠村（2026年度まで） 砂山（2027年度から）	主にWebフォームからの入会希望に対応（名簿には自動的に追加される）、希望者はMLにも追加。退会・ML削除希望も同。年度末に現在の会員数および1年間の退会者名を確認し、世話役会および総会で報告する。 2026年度は篠村さんが担当しつつ、砂山さんへ引継ぎ、2027年度に交代する。
■会計	・会計	佐藤	増田（2025年度まで） 佐川（2026年度から）	会計報告、会計監査、予算案作成を行い世話役会と総会で報告する。2025年度の会計監査までは増田さんが担当し、2026年1月に佐川さんへ引継ぎ済み。
■Web管理	・HP管理 ・Seraseraアップロード	飯田	大河（2026年度まで） 岡田（2027年度から）	編集主任からきた原稿をアップ 2026年度は大河さんが担当しつつ、岡田さんへ引継ぎ、2027年度に交代する。
■会報編集	・原稿確認	市野／水田	大河（2026年度まで） 岡田（2027年度から）	原稿の確認（主要な仕事は編集主任が行う）。2026年度は大河さんが担当しつつ、岡田さんへ引継ぎ、2027年度に交代する。
■大会運営	・総会	水田	適宜	資料の草案作成は水田から事務局に適宜指示。当日は事務局が参加者数を確認。後日事務局がSerasera掲載用の総会報告を作成し水田が確認。
	・講演会＋懇親会	蒲生（東京）、佐藤（京都）、蟹江（逗子）	適宜	大会担当世話役が会場に合わせて運営方針を定め、適宜、事務局やバイトに協力を要請する。
■世話役会	・開催準備	水田	各担当者	日程調整は水田、資料の草案作成は水田から事務局に適宜指示、終了後事務局で議事録を作成し水田が確認後世話役MLで配布。

【マダガスカル研究懇談会会則の変更について】

これまで事務局員の任期が定められていなかったため、会則の第 13 条第 3 項に任期を明記することとし、会則の改訂案が示されました。この改定案は総会で承認されました。

なお、改訂された会則は本ニュースレターの末尾に掲載されています。

【懇談会の今後に関するアンケートの実施について】

2025 年 3-4 月にマダガスカル研究懇談会の今後に関するアンケートが実施され、その結果が総会で報告されました。今後も懇談会のあり方については議論を続けていきます。アンケート結果の詳細は本ニュースレターの記事をご覧ください。

マダガスカル研究懇談会の今後に関する
アンケートの結果について

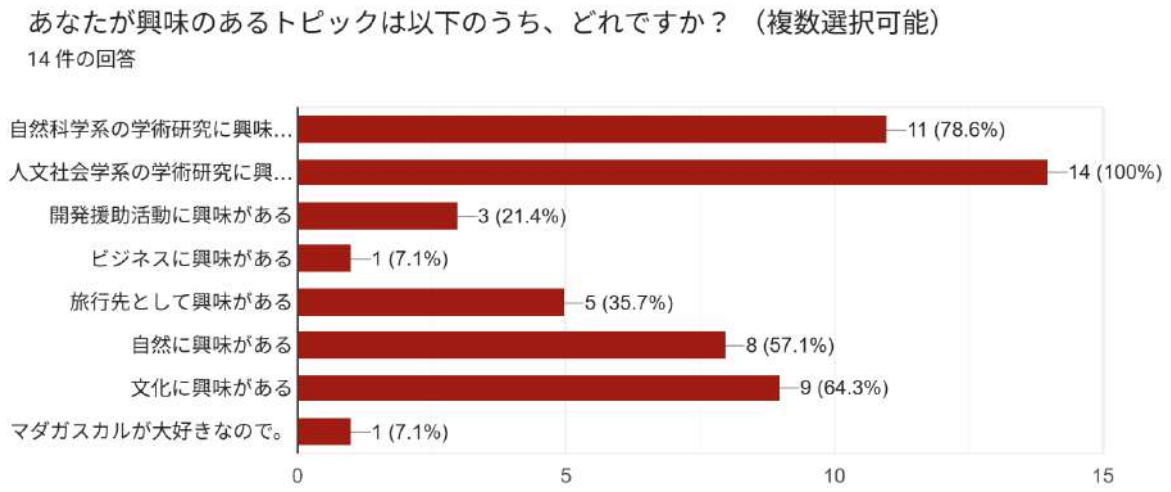
マダガスカル研究懇談会は、1999 年の発足以来、マダガスカルを愛するさまざまな属性の方々の情報交換の場として機能してきました。しかし、近年はインターネット技術の発展により情報の授受が格段に容易になり、懇談会の価値は以前に比べ相対的に低下しているのかもしれません。会員の懇談会へのかかわり方も変わっており、世話役会では、懇談会をこのままの形で運営していけるのか、形を変えていくべきなのか、あるいはいっそ閉会してしまってもいいのではないか、等々、いろいろな議論が出ています。

そこで、世話役会では Google フォームを用いてマダガスカル研究懇談会の今後に関するアンケートを実施することとし、2025 年 3 月 5 日から 4 月 13 日にかけて、メーリングリストおよび懇談会大会で回答を呼びかけました。

回答数は残念ながら 14 件と少なく、この回答をもって懇談会の今後の方向性を決めることはできません。しかし、せっかく実施したアンケートですので、設問と集計した回答を報告しておきます。

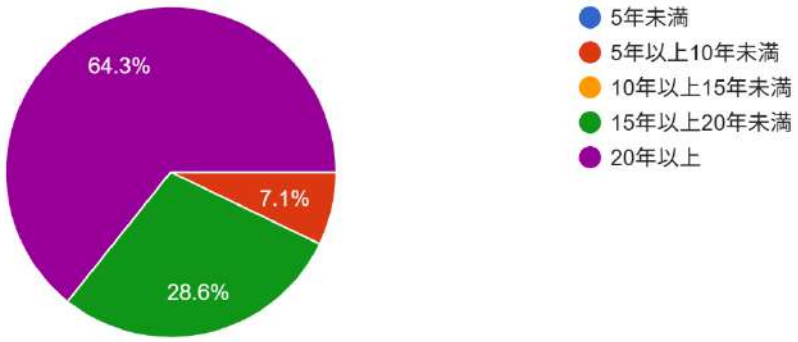
懇談会の今後は会員すべてに関係のあることですので、これを機に皆さんも積極的に会にかかわっていただければと思います。

（世話役代表・水田拓）



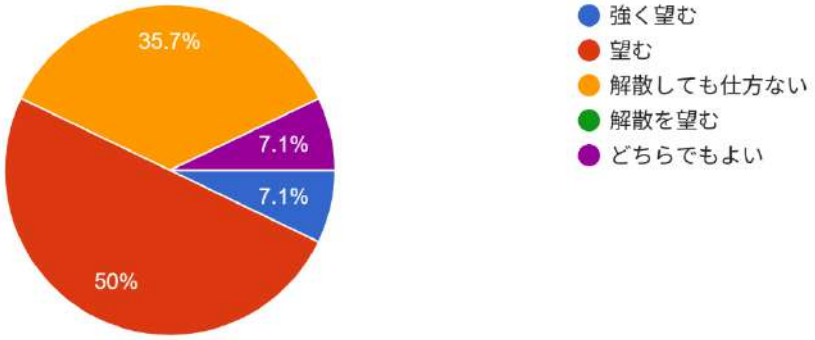
あなたは本会に何年所属していますか？

14 件の回答



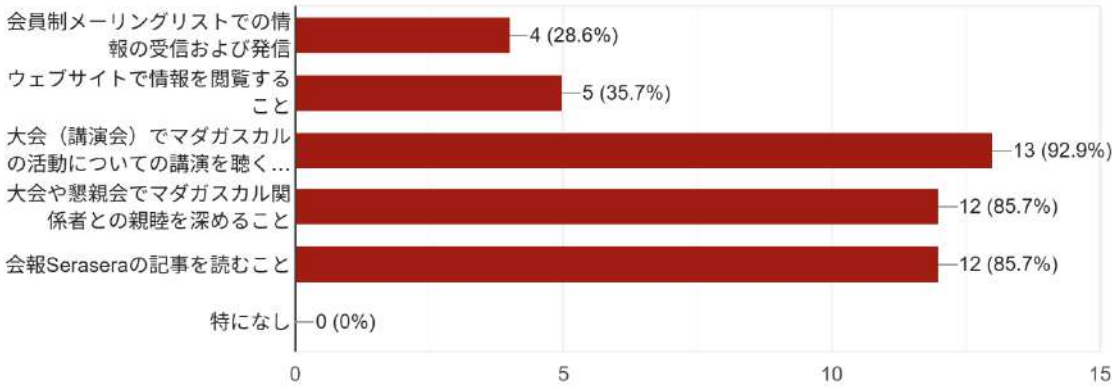
会の存続を望みますか？

14 件の回答



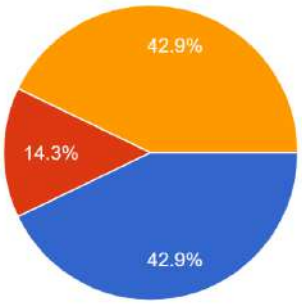
あなたが重視する本会のサービスを選択してください（複数選択可能）

14 件の回答



会員制メーリングリスト（登録無料）の今後について

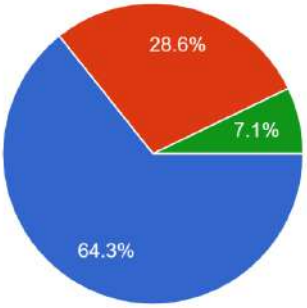
14 件の回答



- メーリングリストで情報を受け取る会員制度は継続したほうがよい
- ウェブサイト等で情報発信をしていれば、会員制メーリングリストは不要
- どちらでもよい

ウェブサイトの今後について

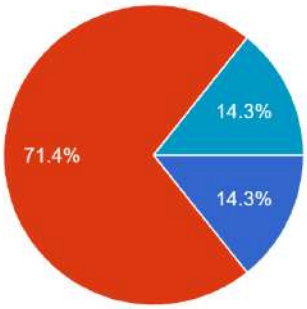
14 件の回答



- 現状のようにウェブサイトの運営を続けてほしい
- ウェブサイトは今後、更新しなくてもよいが、閉鎖はしないでほしい
- ウェブサイトは閉鎖してもよい
- どちらでもよい

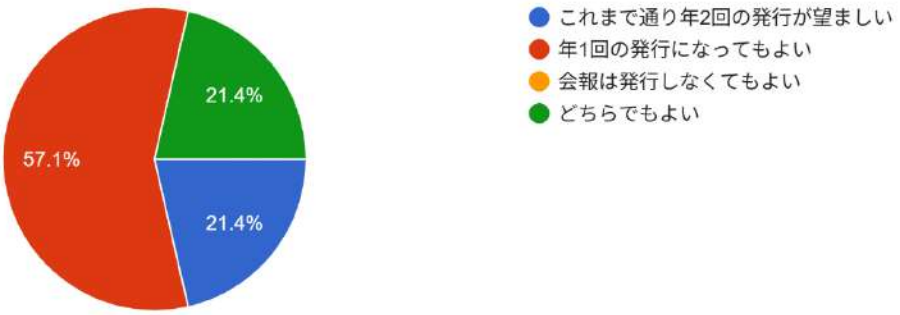
大会（講演会）の今後について

14 件の回答



- 参加費1000円を支払うので、対面形式で開催してほしい
- 参加費1000円の対面参加と参加費無料のオンライン配信のハイブリッド形式...
- 参加費無料でオンラインのみで開催してほしい
- 大会は開催しなくてもよい
- どちらでもよい
- 参加費無料にして、運営費が尽きるまで対面形式で開催してほしい（運営費が...

会報Seraseraの今後について
14 件の回答



【自由記述】

本会の今後（存続・運営・サービス）に関し、ご意見がありましたら、自由にご記入ください。どの項目のことでも、全体のことでも構いません。

10 件の回答（注：アンケートに答えた方の個人名が書かれていた場合は伏せてあります）

・講演会をオンライン配信する場合、参加費がかかっても良いと思います。

・マダガスカル研究懇談会発足時から運営に携わっておられる事務局他のみなさま，大変お世話になり，ありがとうございます。私は「進化の島マダガスカル」の植物を研究したく，近藤典生教授のおられる東京農大に進学しました。1968 年当時の育種学研究室（現進化研）新入生は，ホロホロ鳥と白色レグホンの世話が必須となっており，私は鳥アレルギーのため，育種学を断念しきました。康光が最初にマダガスカルに渡航したのは 1973 年，現地で東京農大のグループと交流し，吉田彰氏と知り合いました。その後農大の調査グループに参加した康光から吉田彰氏を紹介され，即，私と同窓であることがわかり，現在に至っています。康光と共に 2000 年から 2012 年まで，中央高地の火山を調査しておりましたが，2013 年（関東大震災 90 年）より，実生活に直結する「関東大震災の研究」に切り替えました。関東地方の大災害は，1923 年の関東大震災が最新の災害なのです。そんなわけでマダガスカルも 2012 年の渡航が最後となりましたが，マダガスカルに対する想いは今も続いています。ご無理のない範囲で，マダガスカル研究懇談会が存続することを希望します。

・学術関係者だけではない、幅広い愛好者が集う会になってほしい

・昔と違ってインターネットで気軽に世界中の情報が手に入るようになった今、本会の存在意義はかつてより薄れ、会の運営を牽引してきた深沢さんがお亡くなりになり、世話役のみなさんの高齢化も進んで、これまでと同様の会員サービスを提供しつづけることは難しいのではないかと推察します。 会報の編集は大変なので、既存の SNS を利用したファンページやブログでの随時記事掲載にしてはどうかと思います。

・以前の研究懇談会は、メンバーが自主的に勉強会を開くなど会員が積極的に関わっていたように記憶します。現在は事務局の中だけで事が回っている印象を受け、一般会員からの積極的なアプローチがないように思います。それは一般会員が無関心だからでなく、関わっていくことに魅力を感じていないからではないでしょうか？大学関係者メインの大会だけ重視するのではなく、もっと門戸を広げ相互の関わりを活発にしない限り、研究懇談会は先細りしていくばかりかと考えます。私は事務局に関わった事がないので、実際に働いていない会員が世話役の苦労が分かるかと言われるかもしれませんが、大学関係者だけでなく一般会員がもっと関われるような形にしなければ研究懇談会は活発にならないと思います。この 10 年ほど内輪だけの集まりに矮小化している印象があり、そちらを改善して新しい形で存続はできないのでしょうか？

・事務局の負担を軽減し無理のない範囲で存続してほしい

・SERASERA に関しては、毎回の編集作業も大変だと思いますので、発行しなくても良いのかもしれません。メーリングリストは、SERASERA の発行や大会の情報などを知ることができましたが、こうした活動を続けないのであれば、なくてもいいかと思いました。大会に関しては地方に住んでいてなかなか参加できないので、オンラインも活用しながら配信していただけるとうれしいですが、運営が大変なようでしたら開催しなくても良いのかもしれません。マダガスカルの最新の研究や情報を見られるとことはあったほうがいいと思うので、ウェブサイトは残し、活用してみてはどうかと思いました。どうぞよろしくお願いいたします。

・世話役会や事務局に関係のない人の発表も聞いてみたいです。どのように候補者を探すかが問題ですが。

・いつもありがとうございます。資金不足が問題であれば、クラウドファンディングのような方法もあるかと思いますがいかがでしょうか。組織的なつながりは何も持っておりませんが、何かできることがありましたらお声がけください。宜しくお願いいたします。

・マダガスカル研究懇談会で，会員の皆さまとお話しできることを楽しみにしています。 初めてマダガスカルに渡航してから 51 年も経っているのに, 大学を含めてさまざまな場面で独立できてないと感じることが多々あります。インフラ整備など自国でできないのか，大変気になります。

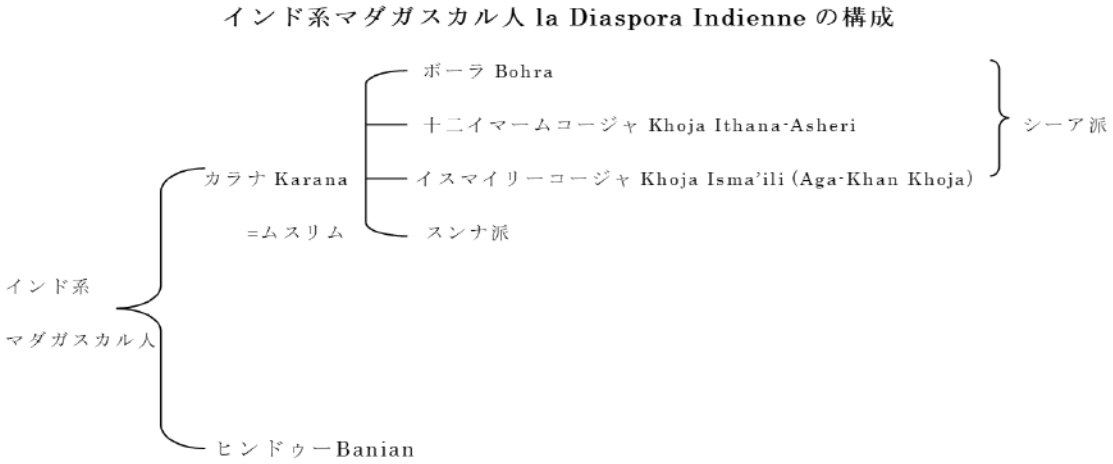
マダガスカルにおけるカラナKaranaの経済活動とその歴史
－十二イマームシーア派コージャ Khoja を事例として－

藍澤光晴（流通経済大学）

1. はじめに－コージャ Khoja とは－

マダガスカルには、カラナ Karana とよばれているインド系の人びとが存在している。報告者は、2004 年初めてのマダガスカルへの渡航以降、カラナ、そのなかでもとりわけ、コージャ Khoja の経済活動とその歴史についての調査を実施してきた。そこで本報告では、おもに 2007 年 7 月から 8 月にかけて実施した聞き取り調査の分析を通して、コージャの経済活動と移住の経緯等を報告した。なお調査に使用した言語はフランス語である。

さて、カラナはどのくらいマダガスカルに存在しているのだろうか。確かな数は不明だが、2 万人程度とされている。その多くは自営業者で、金物屋（カンカイユリ Quincaillerie）、自動車部品販売店、家電製品販売店、貴金属店などを経営し、経済規模はマダガスカル国内総生産 GDP の 15%程度を占めているという（註 1）。マダガスカルにおけるインド系の構成は以下の図の通りである。多くのコージャは、シーア派のムスリムであり、十二イマームとアーガー・カーン Aga-Khan 派に属している。今回は、十二イマーム派のコージャへの聞き取り調査に基づく報告である。



（出所）報告者作成

コージャは、インド西部のグジャラート Gujarat 出身で、13 世紀にヒンドゥーからムスリムに改宗した、グジャラート地方の世襲的職業集団であるロハーナ Lohana のジャーティーjati である。ロハーナとは、グジャラートはもちろん東アフリカを含めインド洋西部の港市における仲介業者、「港の商館

（倉庫）でのカウンター業務係 Comptoir」である（以下「コントワール」とする）。つまり、ムスリムに改宗してもなお、インド独自のジャーティーがコージャを規定しているのである（註 2）。

文房具店の看板にみられるコントワール Comptoir の文字（ツァラララナ Tsaralalana）。2007 年撮影。

２．コージャに伝わる移住の歴史

調査によると、マダガスカルに最初に来たコージャは、1865 年にザンジバル Zanzibar からヌシ・ベ Nosy-Bé に来た三人であったという。シェリフ・ジヴァ・スルティ Sherif Jiva Sourti、モロウ・カンジェーMolou Kanjee、アリバイ・タワール Alibhay Tahwar の三人である。彼らは、ザンジバルですでに「コントワール」として成功しており、販路拡大のためにマダガスカルに新たな拠点、つまり「コントワール」を築くためにやってきたという。その後、アリバイ・タワールは、グジャラートから義弟をマダガスカルに呼び寄せたという。なお、ザンジバルからの商業を目的とした移動の成功が、やがてグジャラートからマダガスカルへの直接移住（1880 年代～）のプル要因となった。またプッシュ要因の一つには、グジャラートでの地震や度重なる飢饉と疫病の流行などがあったこともあわせて報告した。

移住後の「コントワール」としての経済活動についても報告した。具体的には以下の証言の通りである。

19 世紀後半、マルヴアイ Marovoay は、稲作と鰐皮の生産で栄えており、数人のコージャが、マルヴアイ＝マジュンガ Majunga 間で、小船による運送業を経営していた。マルヴアイのさらに奥地の街マエバタナナ Maevatanana では、金の採掘が盛んだったために、マルヴアイには、金細工職人のヒンドゥーが住んでいた。コージャは、マルヴアイやマエバタナナのヒンドゥーにインドからの物産を売却し、米と鰐皮をマジュンガの港まで、小さな帆船であるブートル Boutre（註 3）で運搬していた。ちなみに、マルヴアイには、1905 年のマジュンガよりも早い 1896 年にモスクが建設された。

ムルンダヴァ Morondava に停泊中の帆船（ブートル）（1898 年）。
（出所）F.T.M. マダガスカル国立測地・地図製作研究所所蔵。

マジュンガの街の中心にあるマジュンガ＝マルヴアイ間で運送業を営んでいた兄弟の墓。プレートには 2 人の名前と死亡したと思われるおおよその年が記載されている。それによると兄は 1880 年くらい、弟は 1890 年くらいに死亡したと記されている。
2007 年 10 月、深澤秀夫氏撮影。

さらに、コージャが、マダガスカルに牛の荷車 Charrette（以下、牛車）を持ち込んだ可能性についても言及した。

コージャが、さまざまな豆の種をマダガスカル人に配り、生産させ、収穫物を、この牛車で収集して、近くの港まで運搬していた。港で、欧米の貿易会社に売却した。当初、牛車は、コージャによって運転されていたが、その後、マダガスカル人がこの牛車を操作するようになった。

つまり、コージャが牛車の操作方法をマダガスカル人に教えたという。

3. コージャの経済活動

本節では、コージャの現代の経済活動について報告した。バルダイ La Société Barday のように、一部は財閥化している事例を報告したが、多くは「コントワール」、仲介業者として小規模な小売、卸業を営んでいることを指摘した。コージャの多くは、中国製の家電、玩具類、工具・建材（カンカイユリ）などを取り扱う自営業者であり、現在もグジャラートのジャーティーである「コントワール」を引き継いでいることを報告した。以下の証言には「コントワール」としてのコージャの経済活動が表現されている。

わたしの店では、中国広東省のメーカーから年間 70 コンテナを仕入れないと現在の価格を維持できない。「もし、これを下回る量の商品を仕入れるのならば、現在の価格での取引は不可能だ」とメーカーからいわれている。2 週間毎にコンテナが、タマタヴの港に着く。70 コンテナのうち 30 コンテナがテレビ、その他のコンテナは扇風機、ビデオコンパクトディスク（VCD）、自転車などである。2 週間毎に大量に到着する商品を、小売店に卸すのがわたしの仕事だ。来る日も来る日もエクセルで在庫管理ばかりをしている。少しでも仕事をサボって商品を売らなかったら、わたしの店はすぐに潰れてしまう。とにかく安く、大量に仕入れて、できるだけ安く卸すことが、マダガスカルで商売するもっとも大事なことだ。品質ではなく、価格が全てだ。中国製品の品質が悪いのは、マダガスカル人もよく知っている。しかし、悲しいかな、悲しいかな、悲しいかな、悲しいかな･･･、マダガスカルでは安い商品しか売れない。マダガスカル人は、ヨーロッパ人や日本人と違って、品質ではなく、価格しか見ていない。マダガスカルに流通している家電製品の 65%は中国製だ。今では、商品の発注は、カタログが国際宅急便の DHL で郵送されてくるので、カタログを見て、インターネットで発注している。もし、日本のメーカーでこのカタログよりも安い商品があるのならば、教えてくれ。いますぐにでも、商談に応じるよ。これ程安い商品を仕入れているのは、マダガスカルではわたしだけだろう。

独立大通りにあるコージャの店舗。2007 年撮影。

４. おわりに

最後に、1987 年 2 月から 3 月にかけて起きたカラナ排斥運動について、聞き取り調査の結果を報告した。さらにその後のコージャのアイデンティティ複雑性についても指摘した。

カラナ排斥運動は、マダガスカル人のカラナへの日ごろの不満を、当時の大統領ラティラカ Ratsiraka が利用し、自らの政権の延命のために実行したオペレーション（オペレーション・カラナ Operation Karana: OPK）であった可能性について言及した。また、その後のコージャの社会活動 Sociale act の展開についても報告した。具体的には、マダガスカル社会・文化イスラーム高等会議 le Conseil Supérieur Socio-Cultural Islamique à Madagascar の組織化を通して、診療所 Despensaire と老人ホーム Logement-Socio の開設、井戸の掘削、刑務所慰問などの展開である。これらの社会活動は、もちろん圧倒的な経済力を持つことで、「外国人」であるコージャを含めたカラナへの不満を和らげるために実施されていることは間違いはない。

イタシーItasy 地区の診療所 Despensaire の看板。2007 年撮影。

またコージャの複雑なアイデンティティについて報告した。寄せて集めて自分で作るいう意味があるコージャのブリコラージュ Bricolage 的な主体のあり方について指摘した。次の証言がその実態をよく表している。

わたしの国籍は、マダガスカルだけど、マダガスカル人にはなれない。メンタリティーは、インド人としてのガンディーの影響も受けている。さらに、ロハーナとしての商人の血も騒ぐ。だけど、インドに行くには、いまやビザが必要だし、インドに親戚は、もういないし、交流もない。インド人でもマダガスカル人でもなく、十二イマーム派の中心であるイラン人でもない。それら全てがミックスされているが、そのどれでもない存在がわれわれコージャだ。まさに、コージャという「民族」である。まるで、「ジプシー」や「ノマド」のような存在だ。われわれは、十二イマーム派のコージャであり、マダガスカルで生きるコージャという「民族」でもある。

（註 1）Blanchy, Sophie, *Karana et Banians: Les Communautés Commerçantes d'Origine Indienne à Madagascar*, L'Harmattan, 1995 および Razafimandimamby, Noro, Communaute Indienne: 0.2% de la Population 15% du PIB, *Revue de l'Océan Indien*, juin 1999, pp. 25‐33 を参照のこと。

（註 2）ロハーナのジャーティーについてのより詳細な説明は、藍澤光晴「マダガスカルの植民地化と十二イマームシーア派コージャの経済活動」日本オーラル・ヒストリー学会『日本オーラル・ヒストリー研究』第 12 号、2016 年、pp. 223‐237 を参照。

（註 3）ブートルとは、二本マストの木造船のこと。アラビア語のブーム Bum が語源と考えられる。

【主要参考文献】

Le Monde, Paris N°2001 Jeudi 5 Mars 1987.

Allen, Calvin H., Jr., The Indian Merchant Community of Masqat, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London, 1981, pp. 39‐53.

Blanchy, Sophie, *Karana et Banians: Les Communautés Commerçantes d'Origine Indienne à Madagascar*, L'Harmattan, 1995.

Catat Louis, *Voyage à Madagascar (1889-1890)*, Paris, Librairie Hachette et Cie, 1895.

Razafimandimamby, Noro, Communaute Indienne: 0.2% de la Population 15% du PIB, *Revue de l'Océan Indien*, juin 1999, pp. 25‐33.

Verin, Pierre, Note sur Le Commerce, Economique des Cotes Nord-Ouest de Madagascar au 19e Siecle, *Revue Economique de Madagascar* n°6, 1971, pp. 137‐145.

上野俊哉「ディアスポラとノマドー『保証なき主体』の境位をめぐってー」『現代思想』vol.26-4、社会思想社、1998 年、pp. 172‐189.

藍澤光晴「マダガスカルの植民地化と十二イマームシーア派コージャの経済活動」日本オーラル・ヒストリー学会『日本オーラル・ヒストリー研究』第 12 号、2016 年、pp. 223‐237.

藍澤光晴「フランス植民地における移民政策ーマダガスカルを事例としてー」九州経済学会『九州経済学会年報』第 56 集、2018 年、pp. 1‐6.

マダガスカル特産オオハシモズ類
－私の研究史－

中村雅彦（上越教育大学名誉教授）

はじめに

1999 年 7 月 1 日発行のマダガスカル研究懇親会のニュースレターの創刊号に私の指導教官の山岸哲先生（以後、山岸さん）が、「マダガスカルの鳥」というタイトルで寄稿している。内容は 3 つあり、一つ目は「オオハシモズ科の適応放散の研究」、二つ目は「アカオオハシモズの社会に関する研究」、三つ目は「種間社会の研究」で、最後に世界の中でマダガスカルにしかいないオオハシモズ科鳥類（バンガ）について多方面からアプローチする「バンガ・バイオロジー」とでも呼ぶべき研究を行っていることを紹介している。この原稿の中には共同研究者の九州大学の江口和洋さん、京都大学の浅井芝樹さん、系統解析には京都大学の本多正尚さん、種間社会の研究には森林総合研究所（当時）の日野輝明さんの名前はでてくるが、私の名前はない。その理由は、山岸さんが創刊号の原稿を書き終えた後の 1999 年 10 月から私のマダガスカルの鳥の研究が始まったからである。ここでは、私のオオハシモズ類の研究の歴史を時系列に沿って振り返ってみる。

1999 年研究開始

1999 年に山岸さんから、科研費（科学研究費補助金）の研究分担者としてマダガスカルの鳥の調査に声をかけていただき、再びマダガスカルへ行くことになった。1990 年（当時、私は 32 歳）に山岸さんと一緒に科研費の研究協力者としてマダガスカルに渡航してから 10 年後である。この間、私はマダガスカルに関わっていない。私は 1991 年に上越教育大学に職を得て、1992 年にイワヒバリという高山鳥類で学位を取得し、長野県と岐阜県の県境にある乗鞍岳でイワヒバリの継続調査をしていたからである。私はイワヒバリの配偶システムは協同多夫多妻という鳥類で極めてまれな社会であることを発見し、世界に 13 種いるイワヒバリの仲間の配偶システムを比較しようと考えていた。イワヒバリの仲間のほとんどがヒマラヤ山脈に分布している。手始めに台湾の高山帯に生息するタカサゴイワヒバリに狙いを定め、準備を進めていた。しかし、オオハシモズ類の奇妙な形態（特に嘴）をみて、アカオオハシモズの協同繁殖を知り、研究材料をイワヒバリからオオハシモズ類に変えた。オオハシモズ類は世界の中でマダガスカルにしか生息しない固有種である。しかし、ダイヤモンド社の「地球の歩き方」にはキツネザルやバオバブにおされ、オオハシモズ類は一回も掲載されていない。調査地が「マダガスカル」というのも私の興味をそそった。当時、マダガスカルは秘境だった。昔、マダガスカル調査を終えて日本に帰ってくると、大学の教官仲間から、「ガラパゴス」は大変でしたね、とか「スリランカ」はどうでしたかとよく聞かれた。マダガスカルは大学の教官でさえ名前を間違える秘境なのである。調査開始時は、研究という名を借りてマダガスカルの色々な場所で、オオハシモズ類を求

めて「探検」しようと考えていた。私が行く場所はマダガスカル人でもよく知らない場所だった。調査を手伝ってくれたアンタナナリボ（Antananarivo）大学の学生には「中村さんはアドベンチャーですね」とよく言われた。

調査方法

1999 年、2000 年と 2005 年はアンピズルア Ampijoroa で調査をした。調査の目的は、対象とするオオハシモズ類の配偶システムを明らかにすることである。配偶システムには一夫一妻、一夫多妻、一妻多夫、多夫多妻、協同繁殖がある。これらを明らかにする方法は次の通りである。まず、調査地で、できるだけ多くのオオハシモズ類の巣を見つける。巣を見つけたら、巣の所有者をかすみ網で捕獲し、体の部位（たとえば翼長や体重）を測定、足にカラーリングを装着、捕獲個体から少量の血液採集（DNA による性判定のため)、放鳥後、巣の近くで行動する足輪つきの個体の求愛や交尾、抱卵行動、育雛行動を直接観察し、これらの行動を録画するビデオカメラの最適な設置場所を探す。その後、巣の近くにビデオカメラを設置し、造巣期、抱卵期、抱雛期、育雛期の雄と雌の分担、雛に与える餌を分析する。これらは一見すると簡単そうだが、実は難しい。まず、巣の発見から難しい。とくに熱帯雨林は、個体数が少なく、木が多いため難しい。個体の捕獲も難しい。多くのオオハシモズ類の巣は木の高いところにあるため、捕獲のためのかすみ網を張れないからである。巣の発見、かすみ網の設置には優秀なマダガスカル人の現地ガイドが必要である。巣の近くにビデオカメラを設置したら、後はビデオカメラに任せる。LP モードを使って 6 時間は連続撮影できる。複数の巣に同時にカメラを設置できるように、マダガスカルでは 5 台のビデオカメラを使った。巣が高いところにある場合、望遠鏡とカメラのレンズ部分をつなぐアダプターを装着し、超望遠ビデオカメラにして使った。観察を機械に任せる方法はイワヒバリの研究から引きついだ私の調査の特徴である。

帰国時はビデオテープだけを日本に持ち帰り、録画された行動や雛に与える餌を分析する。マダガスカルのフィールドワークの時間より、帰国後のテープ解析のほうがはるかに時間がかかる。分析のため、スローにしたり、巻き戻したり、早送りするためである。しかし、秒単位の行動分析ができるのはこの方法ならではである。雌雄で造巣、雌雄で抱卵、雌雄で育雛すれば一夫一妻とした。中には雌だけが抱卵する種もあるが、雌雄で雛に給餌すれば一夫一妻とした。育雛期に一夫一妻以外の個体が雛に餌を与える場合、ヘルパーとしたが、雌との交尾が観察されればつがい雄とした。

同じ時間があるなら、何年も同じ場所にとどまり特定の種を継続調査するのではなく、オオハシモズ類が生息する様々な場所に行き、短期滞在で録画データをとり、事実を刻むように記載論文として発表することを私のマダガスカルのスタイルとした（このスタイルは、野外実験を駆使する私本来のスタイルとは真逆)。

アンピズルア

1999 年当時、オオハシモズ類は 12 属 14 種に分類されていた [1]。当時、オオハシモズ類は、分布、生息場所、繁殖の営巣木、一巣卵数、卵の色などしかわかっておらず、繁殖生態は「few data」とか「no data」という記載だった。アカオオハシモズも当初、繁殖生態はほとんどわかっていなかったが、山岸さんたちのアンピズルアでの調査でヘルパーがいる協同繁殖鳥であることがわかった。

アンピズルアには 6 種のオオハシモズ類がいた。1999 年、2000 年と 2005 年でアカオオハシモズ以

外の 5 種を調べた。5 種のうち 1 種のカギハシオオハシモズは一夫一妻だった。シロノドオオハシモズは、京都大学の水田拓さんが調べた結果、一夫一妻だった。シロガシラオオハシモズは、なわばりや天敵にたいして巣（卵や雛）を防衛するヘルパーのいる協同繁殖、ハシナガオオハシモズは一妻多夫、最後の 1 種はチェバートオオハシモズで、複数個体が巣立ち雛に給餌することがわかった。これらの種は、一夫一妻のつがいを基本として、つがいにヘルパーが付加したり、手伝わない個体、複数の雄が加わる配偶システムなのである。特にハシナガオオハシモズの一妻多夫のシステムは鳥類全体でも数%で、しかも抱卵期に雌は卵を温めながら、巣に近寄る複数の雄に求愛する変わった鳥だった。アンピズルアに生息するたった 6 種でも多種多様な配偶システムを持つ。では、残りのオオハシモズ類はどんな配偶システムなのか。他のオオハシモズ類を求めてマダガスカルの中を歩き回ることは必然だった。

オオハシモズ類を求めて

2007 年から、私は西部乾燥林のアンピズルアを離れ、他のオオハシモズ類の生息地を求めて調査地をマダガスカル全域へと広げていく。

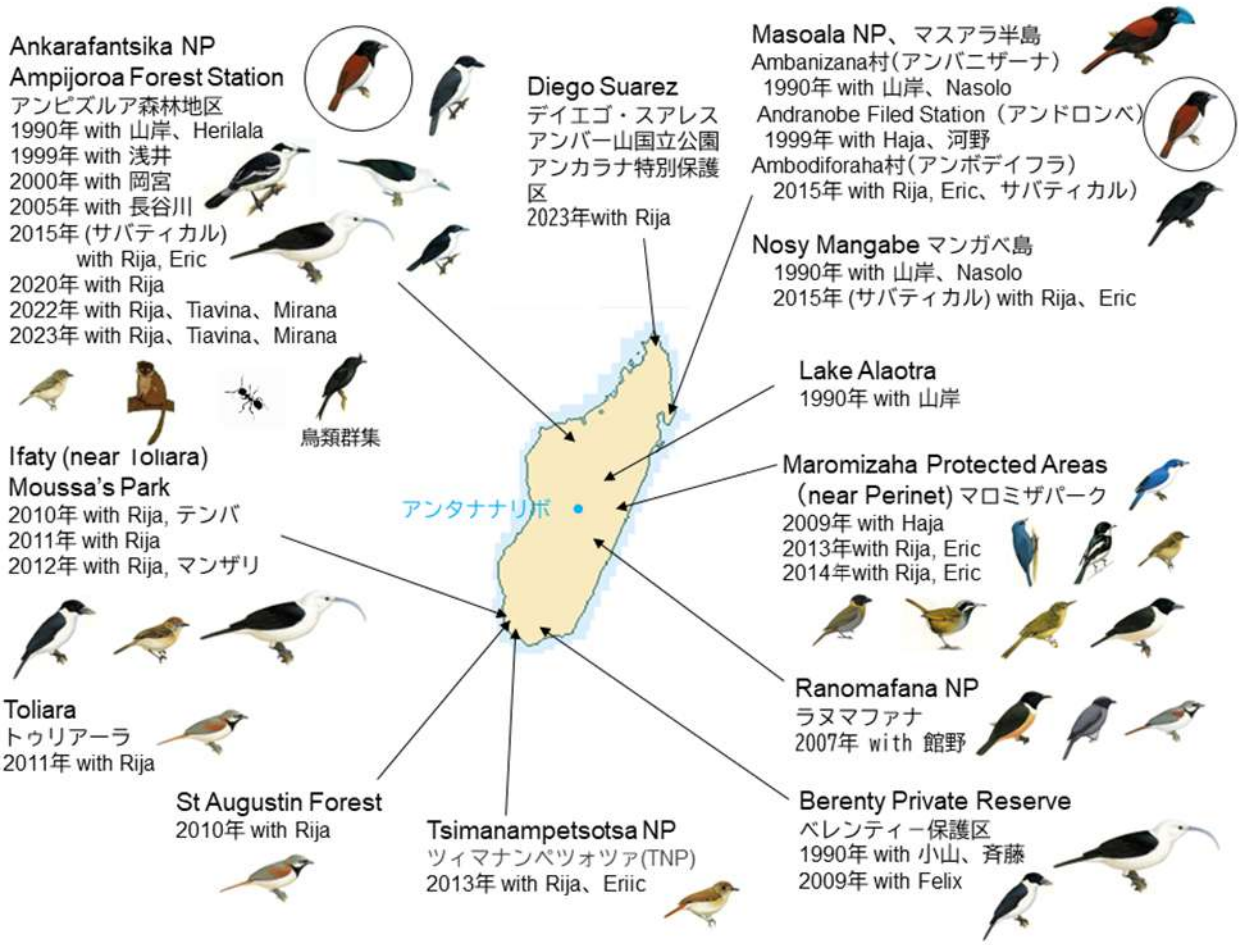


図　私の調査地と調査した生物（イラスト）。詳細は本文参照。

ここで図をみてもらいたい。図は私が何時、どこで、誰と一緒に、どんな生物を調査したか（イラスト）を表している。図の左上に Ankarafantsika NP とあり、その下に 1990 年 with 山岸、Herilala とある。これは 1990 年にアンピズルアで山岸さんとアンタナナリボ大学の Herilala さんと一緒に調査したことを示している。その右側にはオオハシモズ類、鳥類群集、キツネザル（ブラウンキツネザル）やアリのイラストがあるが、それらはアンピズルアで研究した生物を表している。こうした見方で私の調査地、調査年度、誰と調査したのか、調査した種をみていただきたい。例えば、山岸さんたちの研究の出発点となったアカオオハシモズ（丸で囲っている）はアンピズルアとマスアラ Masoala 半島に生息している。くちばしの長いハシナガオオハシモズは Moussa's Park やベレンティーBerenty でも調査、マスアラ半島の一番上のイラストはヘルメットオオハシモズ、アカオオハシモズの下の全身真っ黒の種はクロオオハシモズ。マロミザ（Maromizaha）パークやラヌマファナ Ranomafana ではオオハシモズ類以外の鳥も調査している。南はツィマナンペツォツァ TNP から北は Diego Suarez までオオハシモズ類が生息する様々な場所に行き、オオハシモズ類はもちろん、それ以外の鳥やキツネザル、アリまで調査対象とした。アンタナナリボからトゥリアーラ Toliara までの全長 940 km のサザンクロス街道は 4 往復した。図を見れば、私が何時、どこで、誰と一緒に何という動物を調査したことがわかっていただけるだろう。ちなみに 2009 年にはマダガスカルでクーデターが起こった。私はその年、ペリネ近郊のマロミザパークでオオハシモズ類の調査をしていた。

マスアラ半島の熱帯雨林ではヘルメットオオハシモズとアカオオハシモズを調査し、一夫一妻であることわかった。マスアラ半島に生息するクロオオハシモズは姿を見たたことがないが、先行研究から一夫一妻であることがわかっている。マロミザパークで観察したオオハシモズ類は一夫一妻であった。ラヌマファナでは、2 種のオオハシモズを調査し、すべて一夫一妻だった。ベレンティー、TNP、St Augustin Forest、トゥリアーラ、イファティ Ifaty の Moussa's Park の半砂漠有刺林で調査したオオハシモズ類も一夫一妻だった。

HANDBOOK OF THE BIRDS OF THE WORLD

2009 年には山岸さんと共著で執筆したマダガスカルの「Family VANGIDAE (VANGAS)」が「*Handbook of the Birds of the World*, Volume 14: 142-170」に掲載された。Family VANGIDAE の原稿執筆はかねてから山岸さんに依頼があったもので、それまでに私たちが明らかにしたオオハシモズ各種の分類、分布、形態、採食生態、繁殖生態等を二人で執筆した。この本は全部で 17 巻あり、科ごとに世界的に著名な鳥類学者が執筆した世界的に権威のある鳥の図鑑である。この本の執筆者はほとんど欧米人で、日本人の執筆者は私たちだけだった。今までやってきたオオハシモズ類の研究の集大成としてこの本が出版されたことにより、私のオオハシモズ類の研究はこれで終わりかなと当時は思っていた。

2012 年の 2 本の論文

2012 年にマダガスカルのオオハシモズ類の適応放散に関する 2 本の論文[2) 3)]が同時に著名な国際誌に掲載された。2 本の論文は、今までの形態に基づく分類ではなく、遺伝子解析に基づく分類で、近縁の種、枝分かれした年代まで明らかにしている。これらの論文の著者は、オオハシモズ類は、本論文で地上採食のニッチを埋める種が加わり、樹冠から地上までのすべてのニッチを埋める適応放散の鳥類で、適応放散のレベルはガラパゴスフィンチやハワイミツスイ以上と述べている。

2 本の論文は、今までの羅列的な比較ではなく、進化の系統樹の中に私が今まで明らかにしてきたオオハシモズ各種の配偶システムを位置づけることができる論文となった。私にとっては待ちに待った論文だった。

2 本の論文は、マダガスカルのオオハシモズ類は単系統で、今まで研究当時 12 属 14 種だった分類が 15 属 21 種になることを示している。新たに加わった 7 種の中には、マダガスカルでそれまで 1 属 1 種とされていた種が含まれている。15 属中、1 属 1 種の割合（73%）が多いのがオオハシモズ類の特徴である。追加された 7 種のオオハシモズは、従来のオオハシモズ類とは形態が全く異なり、これらの種がほんとにオオハシモズ類？というのが私の率直な感想である。

2011 年に科研費（研究代表者は私、分担者は京都大学理学部の堀道雄さんと森哲さん、国立科学博物館の西海功さん）を得ていた私は、追加された 7 種のオオハシモズ類を求めて再びマダガスカル各地に足を運んだ。2015 年にはサバティカルをもらい半年間、オオハシモズ類の現地調査と研究に没頭できた。2020 年（この年は世界的なコロナ禍で、3 月末にぎりぎり日本に帰国できた。帰国が一週間遅れたらドーハの空港で足止めされていた）、2022 年と 2023 年は京都大学農学部の北島薫さんを研究代表者とするマダガスカル科研費の研究分担者に加えてもらい研究を継続できた。

7 種の結果は以下の通りである。6 種は一夫一妻。熱帯雨林に生息する 1 種は、給餌の際に雌 1 羽とともに雄 2 羽が雛に餌を与えた。交尾行動をみていないので雄は一妻多夫の夫なのか協同繁殖のヘルパーなのかわからない。

系統の縛り

オオハシモズ類の配偶システムは、一夫一妻、タイプの違う協同繁殖、一妻多夫と多様である。一夫多妻があれば、すべての配偶システムがそろうことになる。

オオハシモズ類の中に一つの属の中に複数の種がいる属が 3 つある。これらの生息環境と配偶システムをみてみよう。黒くて太い嘴を持つ *Xenopirostris* 属には 3 種いる（シロノドオオハシモズもその 1 種）。3 種のうち 1 種は熱帯雨林、1 種（シロノドオオハシモズ）は西部乾燥林、1 種は半砂漠有刺林とそれぞれの種は全く異なる環境に生息するが、3 種とも一夫一妻である。

オオハシモズ類の中で最も古い時期に分岐した仲間に *Newtonia* 属がいる。*Newtonia* 属はヒタキという和名がついているが形態的にウグイスやムシクイ類に近く 4 種いる。4 種のうち全島分布する 1 種は、2001 年にオオハシモズ類の遺伝子解析した山岸さんたちによりオオハシモズ類に含められている[4)]。残り 3 種のうち 1 種は熱帯雨林、1 種は半砂漠有刺林に生息し、1 種は、何度も調査にトライしたが、私は未だ姿を見たことがなく、基本的な生態はわかっていない。断片的情報からおそらく一夫一妻だろう。*Newtonia* 属の 4 種はそれぞれ違った環境に生息するが一夫一妻である。

Calicalicus 属には 2 種いて、1 種は熱帯雨林、1 種は半砂漠有刺林に生息するが、2 種とも一夫一妻である。

これら 3 属は、一種一種が全く異なる環境に生息していながら一夫一妻であることから、系統の縛りが強いと考えられる。古い時代に分岐した属は一夫一妻となる仮説を立てたが、必ずしもそうではなかった。

環境の縛り

熱帯雨林や半砂漠有刺林に生息するオオハシモズ類は生息密度が低く、一夫一妻である。例外は、2012 年に新たにオオハシモズ類に追加された 7 種のうち熱帯雨林に生息する種で、この種の配偶システムは一妻多夫か協同繁殖である。彼らの生息地は尾根で、尾根に複数のつがいがルーズコロニーを形成するため、熱帯雨林にもかかわらず密度は高い。

系統の縛りが弱い、いいかえると、環境によって配偶システムが異なる種がいる。ひとつはアカオオハシモズである。アカオオハシモズは西部乾燥林だけでなく熱帯雨林のマスアラ半島にも生息する。西部乾燥林のアンピズルアではヘルパーのいる協同繁殖だが、マスアラ半島で観察した 3 巣の造巣期（1 巣）、抱卵期（1 巣）、育雛期（1 巣）は一夫一妻だった。アカオオハシモズに最も近縁なヘルメットオオハシモズは熱帯雨林に生息し、一夫一妻である。

西部乾燥林では一妻多夫で観察されるハシナガオオハシモズは、半砂漠有刺林のベレンティー（1 巣）、Moussa's Park（3 巣）では一夫一妻だった。ハシナガオオハシモズの抱卵期の雌（若鳥）の求愛行動は Moussa's Park でも観察できた。アンピズルアのハシナガオオハシモズは、ルーズコロニーで繁殖し、複数の巣が集中して存在する。雌は巣の周りだけを防衛し、雌雄で広い採餌行動圏を共有する。一方、Moussa's Park のハシナガオオハシモズは、一夫一妻で広いなわばりを分散して持ち、その中で繁殖と採餌を行う。

アンピズルアで繁殖するハシナガオオハシモズは昔に比べてつがい数が減少しており、一夫一妻で繁殖する割合を増やしている。アンピズルアの現地ガイドは、非繁殖期に国道沿いのユーカリ林に形成されるハシナガオオハシモズのねぐらに集まる個体数も減っていると教えてくれた。ハシナガオオハシモズのねぐらには協同繁殖するシロガシラオオハシモズやチェバートオオハシモズが合流する。ちなみにハシナガオオハシモズに最も近縁な種は協同繁殖するシロガシラオオハシモズである。

密度

オオハシモズ類を求めてマダガスカル国内を渡り歩いた。色々な場所で調査をするとアンピズルアの特殊性、すなわちオオハシモズ類の生息密度が極めて高いことがわかった。一方、熱帯雨林、半砂漠有刺林のオオハシモズ類の密度は低い。特に熱帯雨林ではガイドにボーナスを払うからもっと巣を探せと依頼しても、目のいいガイドでさえ巣を発見できず、たいてい 1 巣だけだった。

協同繁殖する種の生息地として、「好適な繁殖地が限られている」という説がある。「生息地の傾斜勾配」が急であるほど、好適な繁殖地は限られ、その周囲は生息に不向きな環境となる。好適な繁殖地が限られていると成鳥や若鳥が分散できず、そこに留まることでつがいの付加個体になるという説である。アンピズルアではオオハシモズ類の密度が高い。ここでは一夫一妻のつがいに様々な付加個体がついて様々な配偶システムになる。一方、熱帯雨林や半砂漠有刺林は密度が低く、オオハシモズ類は一夫一妻である。密度がオオハシモズ類の配偶システムに影響しているのは間違いない。

では、なぜ、アンピズルアのオオハシモズ類の密度が高いのか。実は、よくわからない。アンピズルアは現在、アンカラファンツィカ国立公園の中の森林地区となっている。私が調査を始めた頃のアンカラファンツィカは厳正自然保護区だった。厳正自然保護区とは、学術的に貴重な動植物の存在が確認され、それらの保護を目的に指定された地域のことである。調査・研究以外の目的に立ち入ることは禁止されている。私は許可を得て入山し、許可を得て鳥の捕獲をしたが、こうした行政の成果が

アンピズルアの鳥の高密度をもたらすひとつの要因になっているかもしれない。

おわりに

マダガスカルを最初に訪れた 1990 年（湾岸戦争でイランがクエートに侵攻した年）から 2023 年までに計 15 回、マダガスカル各地で鳥の調査に従事した。33 年間、上越教育大学に勤めたので 2〜3 年に一回程度、マダガスカルで調査したことになる。調査は科研費によるもので、一回の渡航期間は数ヶ月と短いものの、貴重な経験をさせてもらった。この間、マダガスカルの科研費報告書を 1 冊、執筆・編集し、学会誌（マダガスカル特集号）も 1 冊、執筆・編集した。また、分担執筆の本を 2 冊、共同研究者とともにマダガスカルの鳥類やキツネザルに関する 14 本の論文を発表した。幸いなことに 15 回の渡航でマラリアなどの大きな病気やけがをしたことはなかった。これらは、私が日本からマダガスカルに連れて行った学生がかかってしまった。

個人的な最も大きなマダガスカルの成果は、大学 1 年から毎日 2 箱（マダガスカルでは GOOD LOOK）吸っていたたばこを 2005 年のマダガスカル調査中にやめたことである。27 年続いた喫煙をマダガスカルでやめたことは私にとっては奇跡だった（今も吸っていない）。マダガスカルでは、会議や講義、実験、学生の卒論・修論指導はない。朝から晩まで研究に集中できる。禁煙できたのは、私の禁煙という強い意志より、マダガスカルが私にとってストレスのない環境であることが大きい。

最後に、1990 年からはじまる私のマダガスカルの研究を振り返る機会をいただいた山階鳥類研究所の水田拓博士にお礼を申し上げる。

参考論文

1) Langrand O. (1990) *Guide to the Birds of Madagascar*. Yale University Press, New Haven & London.
2) Jønsson et al (2012) Ecological and evolutionary determinants for the adaptive radiation of the Madagascan vangas. *PNAS* 109 (17): 6620‑6625.
3) Reddy et al (2012) Diversification and the adaptive radiation of the vangas of Madagascar. *Pro.R,Soc* (279): 2062‑2071.
4) Yamagishi et al (2001) Extreme endemic radiation of the Malagasy vangas (Aves: Passeriformes) *J.Mol.Evol* 53: 39‑46.

生きもの図鑑 34

コクレルシファカ

佐川そのみ（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

【和名】コクレルシファカ（霊長目, インドリ科, シファカ属）

【学名】*Propithecus coquereli* (A. Grandidier, 1867)

【マダガスカル名】sifaka, tsibahaka

【名前の由来】「シファカ」のように聞こえる特徴的な音声から。

【分布】

マダガスカル北西部（ベツィブカ Betsiboka 川の北側）の、常緑樹と落葉樹が混交する熱帯乾燥林に生息する（Mittermeier et al. 2010）。マリアラヌ Mariarano 地域では、マングローブ林を利用する群れも確認されている（Chell et al. 2020）。

【分類】

シファカ属は、体サイズの大きい *P. diadema* グループ（4 種）と、小さい *P. verreauxi* グループ（5 種）に大別されるが、本種は後者に含まれる。かつては南西部に分布するベローシファカ（*P. verreauxi*）の亜種（*P. verreauxi coquereli*）として扱われていたが、2000 年代以降の遺伝学的および形態学的な研究に基づき、現在は独立種 *P. coquereli* とする分類が広く用いられている（Mayor et al. 2004, Groves & Helgen 2007）。

【形態的特徴】

体重は 3.7〜4.3kg、全長は 93〜110cm、尾長は 50〜60cm（Mittermeier et al. 2010）で、性的二型は乏しい。体毛は全体的に白色で、胸部および四肢の前面には赤褐色の模様が入る（写真 1）。顔面の一部と耳には毛がなく、黒い皮膚が裸出する。目は黄色い。移動の際は、大きな手足で木の幹にしがみつき、長い後肢で幹を蹴って樹間を跳躍する。キツネザル類は霊長類の中では嗅覚が発達しており、本種を含むシファカ属のオスは喉部分にある臭腺を木に擦り付けてマーキングを行う（Mertl-Millhollen 1979）（写真 2）。採食に関する形態として、臼歯の歯冠には、葉の破砕や種子の粉砕に適した鋭い稜が発達し（Schwartz & Tattersall 1985）、食物を細かく処理することで、消化管での消化を助ける役割を担っている。また、体サイズに対して長い結腸と大きく発達した盲腸を持つため、盲腸内に共生する腸内細菌の働きにより繊維質を多く含む植物からもエネルギーを得ることができる（Campbell et al. 2000）。

【生態的特徴】

昼行性で、複数の雌雄から成る 3〜10 頭ほどの群れを形成する（Richard 1974）。遊動域は 5〜24 ha ほど（McGoogan 2011）。樹上性が強く一日の大半を樹上で過ごすが、採食や遊び行動の際には地上に降りることもある。繁殖には季節性があり、1〜2 月に交尾をした後、約 5 ヶ月の妊娠期間を経て、乾季中の 6〜7 月に通常 1 仔を出産する（写真 3）。野生下での寿命については不明な点が多いものの、飼育下では 30 年生存した記録が存在する（Cassady et al. 2018）。社会構造は一般にメス優位となるが、性別だけでなく年齢などの要因も関連している可能性があり、群れによってはオスより劣位のメスも観察される。個体間の優劣は食物資源を巡る場面で顕著に表れ（Richard 1974）、劣位個体は服従を示す音声を発して優位個体に採食場所を譲る。主な捕食者は食肉目のフォッサや大型の猛禽類、ヘビなどで、これらの捕食者に対しては、地上の捕食者（ヒトを含む）と空中の捕食者とで異なる警戒音声を使い分けることが知られている（Fichtel & Kappeler 2011）。特に地上の脅威に対しては、名前の由来となった「シファカ（Tchi-faks）」のように聞こえる破裂音を連続して発し、警戒や威嚇を行う。

食性は植物食で、若葉、成熟葉、果実、種子、花、芽、茎、樹皮など、植物のさまざまな部位を利用する。主要な生息地であるアンカラファンツィカ（Ankarafantsika）国立公園では、雨季（11〜4 月）には若葉、花、果実などを利用し、乾季（5〜10 月）には成熟葉、芽、樹皮の利用が増えることが報告されている（Richard 1974）。このような季節的な食物利用の切り替えは、食物資源の変動が大きい熱帯乾燥林における本種の採食戦略の一つと考えられる。また、筆者が同じくアンカラファンツィカ国立公園で行った調査では、採食された果実の多くが熟果ではなく未熟果であった。一般に果実食というと熟した果実を思い浮かべやすいが、本種の果実利用にはこのような特徴がみられ興味深い（写真 4）。

【参考文献】

Campbell, J. L., Eisemann, J. H., Williams, C. V., & Glenn, K. M. (2000). Description of the gastrointestinal tract of five lemur species: *Propithecus tattersalli*, *Propithecus verreauxi coquereli*, *Varecia variegata*, *Hapalemur griseus*, and *Lemur catta*. *American Journal of Primatology*, 52(3), 133–142.

Cassady, K., Cullen, J. M., & Williams, C. V. (2018). Mortality in Coquerel's sifakas (*Propithecus coquereli*) under human care: A retrospective survey from the Duke Lemur Center 1990–2015. *Journal of Zoo and Wildlife Medicine*, 49(2), 315–323.

Chell, C., Corral, M. E., Grant, I., Laskai, C. J., Gough, H., Rakotomalala, S. D., Ward, S. J., & Thompson, C. (2020). A brief observation of endangered Coquerel's sifaka (*Propithecus coquereli*) feeding on red mangrove (*Rhizophora mucronata*) vegetation in a mangrove environment, northwest Madagascar. *International Journal of Primatology*, 41(4), 562–565.

Fichtel, C., & Kappeler, P. M. (2011). Variation in the meaning of alarm calls in Verreaux's and Coquerel's sifakas (*Propithecus verreauxi*, *P. coquereli*). *International Journal of Primatology*, 32(2), 346–361.

Groves, C. P., & Helgen, K. M. (2007). Craniodental characters in the taxonomy of *Propithecus*. *International Journal of Primatology*, 28(6), 1363–1383.

Mayor, M. I., Sommer, J. A., Houck, M. L., Zaonarivelo, J. R., Wright, P. C., Ingram, C., Engel, S. R., & Louis, E. E., Jr. (2004). Specific status of *Propithecus* spp. *International Journal of Primatology*, 25(4), 875–900.

McGoogan, K. C. (2011). *Edge Effects on the Behaviour and Ecology of* Propithecus coquereli *in Northwest Madagascar*. Department of Anthropology, University of Toronto.

Mertl-Millhollen, A. S. (1979). Olfactory demarcation of territorial boundaries by a primate: *Propithecus verreauxi*. *Folia Primatologica*, 32(1–2), 35–42.

Mittermeier, R. A., Louis, E. E., Jr., Richardson, M. J., Schwitzer, C., Langrand, O., Rylands, A. B., Hawkins, F., Rajaobelina, S., Ratsimbazafy, J., Rasoloarison, R., Roos, C., Kappeler, P. M., & Mackinnon, J. (2010). *Lemurs of Madagascar* (3rd ed.). Conservation International.

Richard, A. (1974). Intra-specific variation in the social organization and ecology of *Propithecus verreauxi*. *Folia Primatologica*, 22(2–3), 178–207.

Schwartz, J. H., & Tattersall, I. (1985). Evolutionary relationships of living lemurs and lorises (Mammalia, Primates) and their potential affinities with European Eocene Adapidae. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, 60(1).

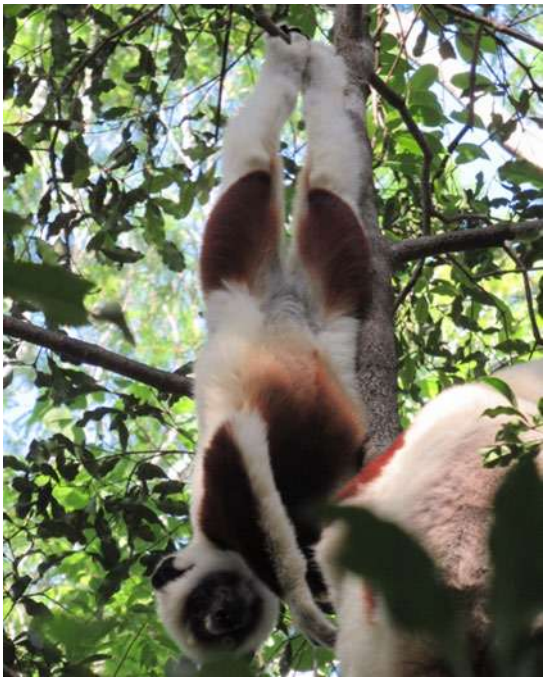


写真 1. 木の枝にぶら下がるコクレルシファカ（アンカラファンツィカ国立公園）。後肢の前面の赤褐色の模様は、短いズボンを履いているかのよう。

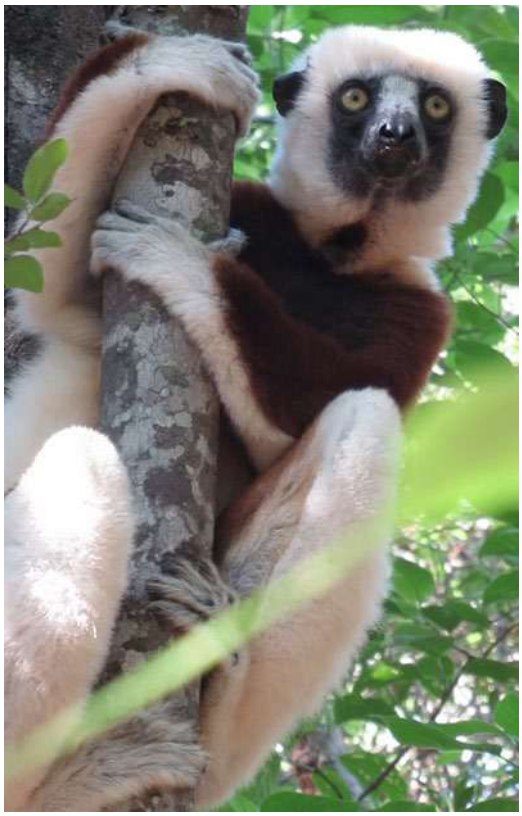


写真 2. コクレルシファカのオス（アンカラファンツィカ国立公園）喉部分には臭腺があり、茶色く着色している。

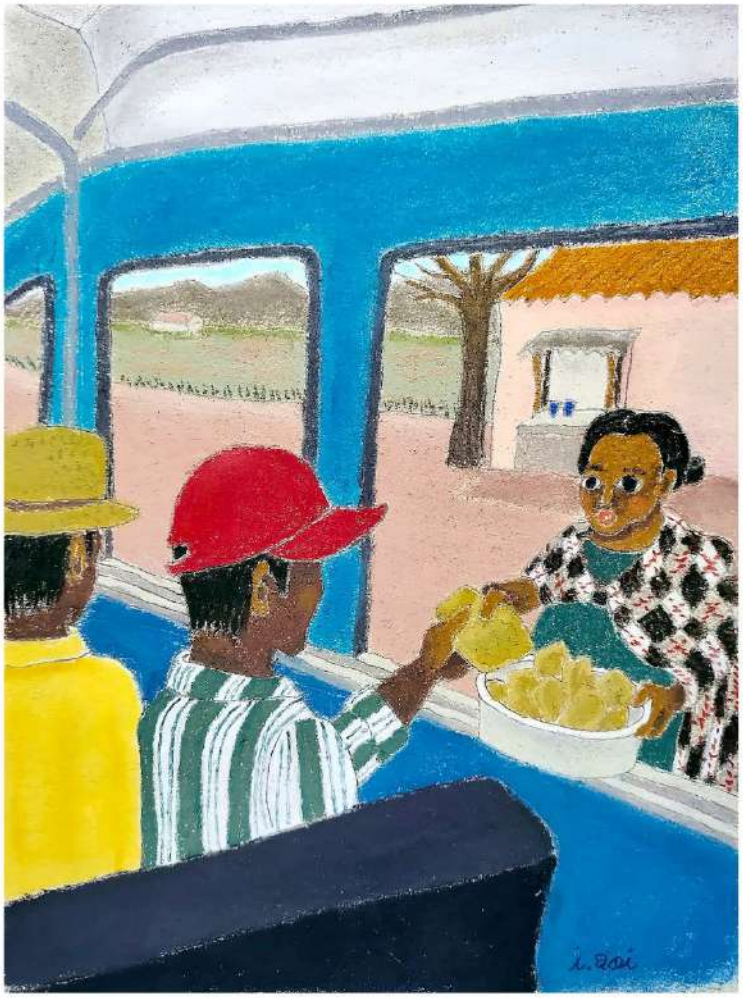
写真 3. コクレルシファカのアカンボウ（左：7 月 10 日撮影、右：8 月 6 日撮影。同一個体。アンカラファンツィカ国立公園）。生後約 1 ヶ月までは母親の腹側で、その後は背側に掴まり運ばれる。約 6 ヶ月で自立して移動するようになる。

写真 4. 乾季に採食していた *Landolphia myrtifolia* の果実（左上：未熟果、左下：熟果、右：シファカによる未熟果の食痕）。未熟果は傷つけると白いラテックスが溢れ出てきて、お世辞にも美味しそうには見えないが、熟果は人間が食べても甘く美味しい。

Moi et Madagascar vol.34

私とマダガスカル

絵・文
元青年海外協力隊
マダガスカル隊員石田



マダガスカルの長距離移動に利用されている乗り合いバスにタクシーブルースがあります。

私は青年海外協力隊として、首都Antananarivoから南西へ約170km離れたAntsirabeに派遣されていました。

首都へ向かう際には、いつもこのタクシーブルースを利用していました。約4時間の道中、途中で一度はどこかに立ち寄って休憩します。どこで止まるかは、その日次第で、ドライバーさんにしかわかりません。ポツンと建つ小屋でコーヒーを飲んだり、小さな村の食堂（hotely）で食事をしたり。トイレ休憩でもあります。

車が止まると、たいてい物売りの女性たちが止まった車の窓辺にやってきて、バナナやピーナッツなどを販売します。

そんな中で、今も心に残っているのが蒸したタロイモ(saonjo)です。まだほんのり温かいタロイモは、ホクホクとしてとても美味しく、忘れられない味になりました。大きな鍋で蒸され、植物の皮でくるまれていたその素朴なタロイモ。日本ではなかなか口にする機会がなく、ふと思い出しては懐かしくなります。

特別寄稿

女三人マダガスカル旅行記

永田優（北海道黒松内町）

はじめに

2024/12/28から2025/1/6にかけて、マダガスカル旅行に行きました。「マダガスカルに行きませんか？」というジョークみたいな言葉を真に受けてくれたのは、前職場の先輩・可奈子さんと土木女子・佑紀さん。この旅行記は、生き物好きな女三人旅の一部始終です。

【12/28 北海道→バンコク】

11:55 新千歳空港発、17:50 バンコク着。空港でトムヤムクンを腹に入れ、1:35 離陸。

【12/29 バンコク→マダガスカル】

6:05 アディスアベバ着。大きな窓から見える日の出の写真を撮っていたら、となりにもカメラマンがいた。可奈子さんだった。コーヒーショップで佑紀さんと待ち合わせ。私と佑紀さんはこの日がはじめまして。8:50 いよいよマダガスカルへ。

13:40 アンタナナリボ Antananarivo 着。所持していたユーロ札をマダガスカルアリアリの分厚い札束へと両替。ひとまず宿へ向かう。タクシーの車窓からは、はじめて見るまちなみ。赤土の道路、野放しのニワトリ、野犬、ごちゃついた屋台...これがアンタナナリボ！！

宿はこぎれいでシャワーはお湯が出た。夕方、雷が鳴り、雨がふりだした。夕食店を探しにアンタナナリボの街中へタクシーで移動。道路は排水がうまくいっていないのか、20cm ほどの泥水が溜まっている場所も。アンタナナリボの繁華街は小高い丘の上にあり、水はけは良かった。目的のレストラン「サカマンガ」は閉まっており、3 件目でようやく飯にありつく。夕食はマダガスカル名物ゼブ牛！満腹幸せ気分で乗り込んだ、帰り道のレトロなタクシーは、窓全開で冠水した道路につっこんで泥水をあびたり、助手席のドアが突然開いたりして、大変なドライブだった。無事宿に到着し、就寝。

【12/30 アンタナナリボ→アンカラファンツィカ Ankarafantsika】

8:25 アンタナナリボから国内線でマハジャンガ Mahajanga へ。10:00 現地で研究生活を送る大河（おおかわ）と彼女のエリさんと合流。大河は私の大学の同期であり、この旅の案内や現地の手配をしてもらった。移動手段であるレンタカーの運転手はジョーさん。荷物を丁寧にカールーフに積み込んでもらい、まずはパンクを直しに修理屋へ。その後マハジャンガの街角のジェラート屋でアイスを頬張る。マダガスカルでは冷たくて甘いものに飢えるんです、と笑顔のエリさん。昼食は大衆食堂でミサウ misao を食べた。テーブルに置かれていたサカイ sakay と初対面。サカイは調味料。辛くてうまい。

マハジャンガの街を出てアンカラファンツィカへ。車窓は地平線の果てまで広がる草原と、わた雲の浮かぶ青い空。3 時間ほどのドライブでアンカラファンツィカ着。国立公園のキャンプ場ではコク

レルシファカが出迎えてくれた。我々3 人はバンガローにチェックイン。きれいな部屋だったが、停電でお湯は出ず。夜、キャンプ場付近の道路をみんなで探検。コクレルシファカの行動を研究している学生のソノミさんも合流。出会えた動物は、寝ていて動かないアフリカブッポウソウ、ギョロ目が可愛いフトオコビトキツネザル、踏みつけ不可避なアフリカマイマイ、とぼけ顔のハナツノカメレオンなど。

国立公園のキャンプ場で出迎えてくれたコクレルシファカ（可奈子さん撮影）

【12/31 アンカラファンツィカ散策】

朝はアンカラファンツィカ国立公園の森林火災跡地を歩き、ヤツガシラ、黄緑色のカルカヤインコ、マダガスカルオウチュウなどを見た。地面は砂地で白く、太陽が昇ると一気に暑くなったため逃げるように帰った。

この日は絶景を見にドライブ。昼食は道ばたの屋台で牛串、揚げコオロギを食べた。コオロギは香ばしくてエビのようだった。赤い土の道に入り、アリ塚が立ち並ぶまばらな草原を進むと、絶景・アンカロカロカキャニオン（Ankarokaroka Canyon）に到着。ものすごい景勝地なのに人っこ 1 人おらず、いつ崩れるかもしれない崖の上で恐る恐る自撮りした。

次に、大きなバオバブを見に行った。その途中に粗放的な水田があり、四葉のクローバーのような水草デンジソウや、オジギソウ、水生昆虫ゲンゴロウの仲間も見られた。水田の隣には放牧されたゼブ牛がおり、のんびりとこちらを見ていた。

夕方、キャンプ場に戻ったら土砂降りが。キャンプ場のレストランで夕食中に何度か停電したが、動じる者はいなかった。暗がりで食べたバターソースチキンが美味しかった。夕食後は佑紀さんの泊まっているバンガローで女三人で晩酌。いい気分になっていたら、バンガロー内に羽の生えたシロアリが入ってきた。何だろうと外を見たら、おびただしい数の羽アリが飛んでおり、外灯の明るいバンガローは完全に包囲されていた。愕然。可奈子さんと私は叫びながら自分のバンガローに逃げ帰った。

水田に生えていたデンジソウのなかま（永田撮影）

【1/1 アンカラファンツィカ→マハジャンガ】

起床したらシロアリの羽は脱落しており、数十匹ほどが部屋を歩いていた。アンカラファンツィカで大河・エリさんと一旦別れて、運転手のジョーさんと女三人でマハジャンガへ出発。朝ごはんは屋台で白粥とチャキチャキ tsakitsaky を食べた。うまい。マハジャンガの市場で買い物中、Booking.com アプリから今日の宿がキャンセルされたという悲報が届く。すかさず代わりの宿を予約する頼もしい佑紀さん。

マハジャンガのきれいなビーチで車を降りたら、女子数名に囲まれてあれよというまに髪を編みこまれた。立て続けにマッサージやタトゥーも勧められるが有料なので一旦断る。大きな生魚を売りにくる女も何度か現れた。海はきれいだった。

マハジャンガの海沿いのホテルに到着し、運転手ジョーさんとはここでお別れ。

【1/2 マハジャンガ→アンダシベ Andasibe】

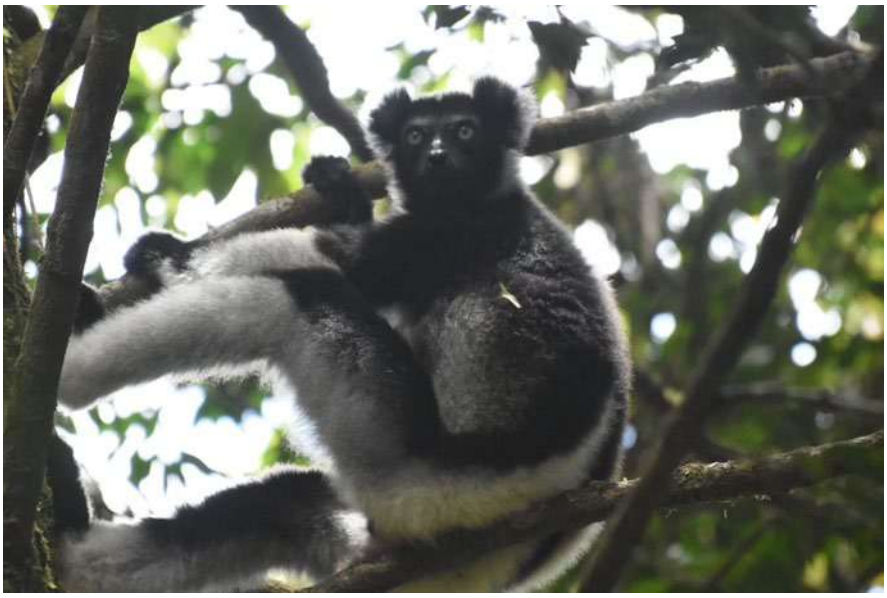
朝ごはんはホテルのバイキング。粥がうまい。しかしこのあたりから胃腸の調子が怪しくなる。マハジャンガ空港までホテルの運転手に送ってもらう。車にエアコンがついていたのはこれが最初で最後だった。10:45 アンタナナリボ空港に着くと、大河とソノミさんが待っていた。新しい運転手ジャスティンさんのレンタカーでアンダシベに向かう。道中は田園風景と巨石の山。アンダシベに近づくと、車窓は熱帯雨林に変わった。夕方ごろ宿に着く。アンダシベは観光地で、田舎だけれど建物は立派だった。

夜は国立公園の二次林のナイトツアーへ。現地ガイドのママは日本語も喋る。幸先よくギュンターヘラオヤモリを見つける。ママは次々に生き物を見つける達人で、グッドマンネズミキツネザル、団子になって寝ているマダガスカルサンコウチョウ、パーソンカメレオンなどが見られた。

ナイトツアーで見られたパーソンカメレオン（可奈子さん撮影）

【1/3 アンダシベ→アンタナナリボ】

朝ごはんはお粥と紅茶とライチ。この日は熱帯雨林の原生林を散策。車 1 台がやっとな砂利道を抜け、原生林に到着すると、大きな青い鳥アオジカッコウがお出迎え。高いところに咲く黄色い着生ランの花が散策路いっぱいに落ちていた。インドリの声が森に響く。インドリを 1 頭みつける。続けてブラウンキツネザルの群れにアカハラキツネザル、クロシロエリマキキツネザルの群れも現れた。あとダイアデムシファカ(アンカラファンツィカとは違う色のシファカ)も見られてみんな大興奮。オレンジ・黒・黄緑色のカエルのマンテラ（Mantella）も捜索ののち無事発見できた。毒々しい色だがきれい。毒はない。帰りぎわにアンダシベのお土産を買って、アンタナナリボに戻る。夕食は道中の大衆食堂でワンタンヌードルを食べた。もう無視できないほどの腹痛、サカイを入れて一気に麺をすする。23:00 アンタナナリボ着。



アンダシベの原生林で見られたインドリ（可奈子さん撮影）

【1/4 アンタナナリボ→バンコク】

朝起きたら部屋からアンタナナリボの街並みがきれい。5 人で歩いて人気店のお粥屋さんを目指す。お粥に牛肉を添えて、あと生姜スープも頼んだ。美味しい。店の女の子が気さくに話しかけてくれた。アンタナナリボの街は物乞いが多く、警戒しながら歩く。車でアンタナナリボ空港へ。お見送りしてくれた大河、ソノミさん、運転手ジャスティンさんと別れて空港に入る。さらばマダガスカル。

19:30 エチオピアに到着し、可奈子さん、佑紀さんはそれぞれの飛行機の便に乗って帰って行った。23:55 私もバンコクへ飛び立った。

【1/5 バンコク→北海道】

12:30 バンコク着。旅の間履いていた登山靴が暑くて臭くて限界。蕁麻疹もでてきて、どうやら体力も限界のようだ。

【1/6 北海道】

12:00 ついに帰国。旅を振り返ると、とても貴重な経験をした。現地を案内してくれた大河、エリさん、ソノミさんには本当に感謝している。そして一緒に旅をしたパワフルな可奈子さんと佑紀さん。道中トラブルも多々あったのに、こんなに楽しい旅になったのは 2 人がいたから。本当にありがとうございました。

見た動物リスト

2024/12/30 アンカラファンツィカ（夜）

- フトオコビトキツネザル
- アフリカブッポウソウ
- マダガスカルシキチョウ
- デカリーヒメカメレオン
- ハナツノカメレオン
- ウスタレカメレオン
- バクチヤモリ
- *Laliostoma labrosum*（カエル）
- *Boophis* sp.（カエル）
- アフリカマイマイ

2024/12/31 アンカラファンツィカ（朝）

- コクレルシファカ
- アフリカバンケン
- カルカヤインコ
- アフリカブッポウソウ
- マダガスカルシキチョウ

・ヤツガシラ
・マダガスカルオウチュウ
・*Sanzinia madagascariensis*（ヘビ）

2024/12/31 アンカラファンツィカ（昼）
・ニシマダガスカルハタオリ
・マダガスカルカワセミ
・ハシナガオオハシモズ

2024/1/2 アンダシベの二次林（夜）
・グッドマンネズミキツネザル
・マダガスカルコノハズク
・マダガスカルサンコウチョウ
・ギュンターヘラオヤモリ
・ウスタレカメレオン
・パーソンカメレオン
・ヒメカメレオンの 1 種（*Brookesia* sp.）
・*Boophis madagascariensis*

2025/1/3 アンダシベの原生林
・インドリ
・ブラウンキツネザル
・ダイアデムシファカ
・アカハラキツネザル
・クロシロエリマキキツネザル
・アオジカッコウ
・マダガスカルヒメショウビン
・マダガスカルサンコウチョウ
・ヘリスジヒルヤモリ
・*Sanzinia madagascariensis*（ヘビ）
・*Mantella madagascariensis*（カエル）

特別寄稿

初渡航のマダガスカルにおける調査
－ゴキブリ類の観察と現地環境－

青木亮悟（東京農業大学・昆虫学研究室）

はじめに

2025 年 2 月、筆者は初めてマダガスカルを訪れ、ゴキブリ類の調査を実施した。本調査は、対象生物の生息環境のみならず、現地の生活環境や社会的背景とも密接に関わるものであり、筆者にとって多くの示唆を得る機会となった。本稿では、ゴキブリ類の生息状況を簡潔に記録するとともに、調査過程において得られた所見を報告する。

調査目的

本調査は、いわゆるマダガスカルオオゴキブリ類（Tribe Gromphadorhini）を中心として、マダガスカルにおけるゴキブリ相の概略的把握を目的として実施した。

表 1 調査日程および調査地

日程	滞在地	中継地
2025 年 2 月 7 日	**Antananarivo**	
2025 年 2 月 8 日		
2025 年 2 月 9 日		
2025 年 2 月 10 日	**Antananarivo-Ambositra**	
2025 年 2 月 11 日	**Ambositra-Ranomafana**	
2025 年 2 月 12 日	**Ranomafana**	
2025 年 2 月 13 日	**Ranomafana-Ambalavao**	
2025 年 2 月 14 日	**Ambalavao-Ranohira**	**Ihosy**
2025 年 2 月 15 日	**Ranohira**	
2025 年 2 月 16 日	**Ranohira-Betioky**	
2025 年 2 月 17 日	**Betioky-Toliara**	**Vahitsara（Tsimanampetsotsa 方面）**
2025 年 2 月 18 日	**Toliara**	
2025 年 2 月 19 日	**Toliara-Ifaty**	
2025 年 2 月 20 日	**Ifaty-Ranohira**	
2025 年 2 月 21 日	**Ranohira-Fianarantsoa**	

2025 年 2 月 22 日	**Fianarantsoa-Antsirabe**	
2025 年 2 月 23 日	**Antsirabe-Antananarivo**	
2025 年 2 月 24 日	**Antananarivo**	
2025 年 2 月 25 日		
2025 年 2 月 26 日		
2025 年 2 月 27 日		

ゴキブリ類の生息状況

最初に訪れたアンタナナリヴ（Antananarivo）周辺は、乾燥した環境であり、ゴキブリ類の多様性は総じて低い印象を受けた。マダガスカル固有種は確認されなかった一方で、ワモンゴキブリ（*Periplaneta americana*）やオガサワラゴキブリ属の一種（*Pycnoscelus* sp.）といった、東南アジアや日本の南西諸島に広く分布する種群が観察された。前者は主として都市中心部における夜間活動個体として、後者は河川沿いの石下において昼間に確認された。

アンブシチャ（Ambositra）では、移動中の中継地としての滞在であり、加えて悪天候の影響もあって野外調査は限定的であった。この地で唯一確認されたのはコワモンゴキブリ（*Periplaneta australasiae*）であり、室内において食品が入っている袋の中から得られた。本種が屋内環境で優占する地域は、相対的に自然度が高い場合が多いとの印象を筆者はもっている。なお、同地では都市部において一般的に見られるワモンゴキブリが確認されず、アンタナナリヴとの相違が認められた。

ラヌマファナ（Ranomafana）は自然環境の保存状態が良好であり、きわめて高い種多様性が認められた。熱帯林環境に適応した森林性種が多く、*Brachynauphoeta brunneriana*（和名なし）といったマダガスカル固有種の存在も確認された。

図１　マダガスカル固有種である *Brachynauphoeta brunneriana*

落葉層（リター）からは主にチャバネゴキブリ科（Family Blattellidae）の複数種が採集され、さらにバナナ茎の枯死体からも多様な種が得られた。

アンバラヴァウ（Ambalavao）では乾燥環境下にもかかわらず、多様なゴキブリ類が観察された。岩場環境では岩隙にマダガスカルオオゴキブリ類が生息し、加えて農具やビニール資材の下といった部分的な湿潤環境には *Deropeltis madecassa*（和名なし）が生息していた。さらには茅葺屋根内部といった人工構造物内にも多様な種が確認された。これらの種構成は、東南アジア系よりもアフリカ系に近縁な要素を多く含み、先述の地域とは異なる傾向を示した。

図２（左）　岩隙に集まるマダガスカルオオゴキブリ類
図３（右）　人工構造物の下でよく観察された *Deropeltis madecassa*

図４　多様な種が観察された茅葺屋根をもつ建物

ラヌヒラ（Ranohira）、ベティウキ（Betioky）、トゥリアラ（Toliara）およびイファティ（Ifaty）では、複数種のマダガスカルオオゴキブリ類が確認された一方、その他の種は少なかった。マダガスカルオオゴキブリ類は樹洞や朽木下にコロニーを形成しており、生息場所を特定すれば多数個体の観察が可能であった。

図５　樹洞で観察されたマダガスカルオオゴキブリ類

調査と現地住民

本調査の聞き取り調査は、現地住民からの積極的な協力によって行うことができた。アンタナナリヴにおいては、マダガスカルオオゴキブリ類の目撃情報について地域を越えた広範な聞き取りがなされた。

またアンバラヴァウでは、事前の連絡に基づき、住民が茅葺屋根内から採集した個体を提示するなど、調査協力が自発的に行われた。さらに、農業従事者やその家族、とりわけ子供たちが対象生物の探索に参加し、すぐに見つけ出す場面も観察され、彼らが日常生活の中で周囲の自然環境を広く把握していると考えられる。

マダガスカルの発展と自然環境

アンタナナリヴの花卉販売店において、小型ゴキブリ類の生息が指摘されていたものの、実地調査では昆虫類の存在は確認されなかった。聞き取りの結果、近年の農薬使用の普及により、都市内の小規模緑地における昆虫相が著しく変化している可能性が示された。すなわち、人為的管理の強化が都市生態系における生物の生息機能を低下させている可能性がある。

図６（右）　アンタナナリヴの花卉販売店の様子
図７（左）　普段から使用しているという農薬

一方で、チンバザザ動植物公園（Parc Botanique et Zoologique de Tsimbazaza）では比較的良好な自然環境が維持されており、多様な昆虫類の生息が確認された。さらに、先述したアンバラヴァウにおける茅葺屋根のように、人為的構造物が新たな生息環境として機能している事例も認められた。これらの事実は、人間活動が生物多様性に対して負の影響のみならず、場合によっては正の側面も有することを示唆している。

道路状況

最後に、年々状況が変化しているという道路状況について記す。

主要道路の舗装状況は概ね通常の範囲内であった。小規模な陥没が頻発する区間はあったものの、時間をかければ問題なく走行可能であった。一方、未舗装道路においては雨季の影響が顕著であり、走行困難な状況が頻発した。ぬかるみによる車両の立ち往生や交通停滞が見られ、実際に数時間にわたり移動が制限される事例もあった。また、ツィマナンペツツァ（Tsimanampetsotsa）方面、ヴァヒツァラ（Vahitsara）では道路状況の悪化および長期間にわたるフェリーの欠航といった交通手段の制約により、調査計画の変更を余儀なくされた。

図８　通行を断念したツィマナンペツツァ方面、ヴァヒツァラの道路

複数の冠水箇所においては臨時道路の設置がなされており、現地住民の案内により通行が可能となる場合もあった。これらの状況は、現地における移動の不確実性と、それに対応する地域社会の柔軟性を示すものといえる。

謝辞

本調査の遂行にあたり、終始多大なご指導を賜った橋詰氏、現地状況の把握およびガイド、宿泊の手配など多大なるご支援を賜った黒川氏、現地において調査のガイドおよび運転手、通訳を務めていただいた Rivo 氏に深く感謝申し上げる。

マダガスカル研究懇談会会則

１９９９年　４月　３日制定
２００２年　３月３０日改訂
２００５年　４月　２日改訂
２００８年　３月２９日改訂
２００９年　３月２８日改訂
２０１６年　５月　１日改訂
２０１９年　３月３０日改訂
２０２１年　３月２７日改訂
２０２６年　３月２８日改訂

第一章　総則

（名称）

第１条 本会はマダガスカル研究懇談会（英名：Japan Society for Madagascar Studies 、マダガスカル名：Fikambanana Japoney ho an'ny Fikarohana ny momba an'i Madagasikara Madagasikara）と称する。

（目的）

第２条 本会は、マダガスカル島及びその周辺島嶼の自然・社会・文化に関する会員相互の情報交換及び交流を促進し、もってこれらに関する研究の発展に資することを目的とする。

（事業）

第３条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

一 懇談会大会の開催

二 電子版による情報の発信

三 前二号に掲げる事業のほか、前条の目的を達成するために必要な事業

第二章 会員

（入会）

第４条 本会に入会しようとする者は、本会が別に定める方法により、入会を申し込むものと

する。

（会員の権利）

第５条 会員は次の権利を有する。

一 第１４条の総会への出席

二 第３条第二号の電子版情報への投稿

三 本会の事業活動への参画

（会費）

第６条 本会の会費は、無料とする。

（退会等）

第７条 本会を退会しようとする者は、事務局（第１３条に規定する事務局をいう）に対して退会を申し出るものとする。

２ 世話役代表（第９条第一号の世話役代表をいう）は、世話役会の決議を経て、次の各号に掲げる会員を強制的に退会させることができる。

一 第２条に規定する本会の目的に著しく反する行為を行った会員

二 本会の活動を妨げる行為を行った会員

三 本会の品位を損なう等の言動又は行為を行った会員

第三章 役員及び事務局

（役員）

第８条 本会に次の役員を置く

一 世話役代表世話役代表 １名

二 世話役世話役 １０名以下

三 会計監事 ２名

（役員の任務）

第９条 世話役代表は本会を代表し、会務を総括する。

２ 世話役は、本会の庶務、会計、渉外、及び第３条各号に掲げる事業の運営を担当する。

３ 会計監事は、本会の財産の状況を監査し、その結果を総会に報告する。

（役員の選任）

第１０条 役員は、会員のうちから総会で選任する。

２ 世話役代表及び会計監事は、役員の互選によってこれを選任する。

（役員の任期）

第１１条 役員の任期は２年とし、再任を妨げない。ただし、世話役代表の任期は連続２期を限度とする。

（世話役会）

第１２条 世話役会は、世話役をもって構成し、世話役代表がこれを招集する。

２ 世話役会は、次に掲げる事項を決議する。

一 収支決算案及び事業報告案

二 収支予算案及び事業計画案

三 会則の制定、変更又は廃止に関する案

四 役員の任期満了等に伴う次期役員候補の選出

五 前各号に掲げるもののほか、本会の運営に関する重要な事項として世話役会が総会に上程することとした事項

六 本会の運営の実務に関する細則の制定、変更又は廃止

七 事務局（第１３条に規定する事務局をいう）の場所の選定及び事務局員第１３条第２項に規定する事務局員をいう）の選任

八 前二号に掲げるもののほか、本会の運営に関する事項であって、総会の決議を要さない事項

３ 世話役会の議事は、出席した世話役の過半数で決する。

４ 世話役代表は、第２項に掲げる事項の全部又は一部を決議する必要があり、第１項の世話役会を招集することが困難である場合には、世話役全員に宛てた電子メールその他の通信手段を利用して世話役全員による協議を行い、その過程において世話役全員の過半数が同意の意思表示をした案をもって、当該事項を決定することができる。

５ 前項の決定があったときは、当該事項についての提案を可決する旨の世話役会の決議があったものとみなす。

（事務局）

第１３条 本会に、世話役代表及び世話役の会務を補佐する機関として事務局を置き、その場所は、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを定める。その場所を変更する場合も同様とする。

２ 事務局に事務局員を置き、世話役会の決議を経て、世話役代表がこれを任命する。

３ 事務局員の任期は２年とし、再任を妨げない。

４ 世話役代表は、第１５条第２項の規定により第３条第一号の懇談会大会その他の催事の開催にあたり参加費を徴収することとし、かつ前項の事務局員が当該催事に参加する場合には、世話役会の決議を経て、その参加費を免除することができる。

第四章 総会

（総会）

第１４条 総会は、会員をもって構成し、毎年１回、新会計年度開始以後４か月以内に、世話役代表がこれを招集する。

２ 総会は、次に掲げる事項を決議する。

一 収支決算及び事業報告

二 収支予算及び事業計画

三 会則の制定、変更又は廃止

四 役員の選任

五 その他本会の運営に関する重要な事項として世話役会が上程した事項

３ 総会の議事は、出席会員の過半数で決する。

第五章 会計

（経費）

第１５条 本会の経費は、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。

２ 本会は、第３条第一号の懇談会大会又はその他の催事を開催するにあたっては、その都度、世話役会の決議を経て、参加者から参加費を徴収することができる。ただし、第１４条に規定する総会のみに出席する会員からは参加費を徴収しない。

３ 前項の規定により参加費を徴収する場合には、世話役代表は、当該催事の開催及び参加費の額を予め会員に通知するものとする。

４ 本会は、第３条各号に掲げる事業の実施にあたり、寄付金を募ることができる。

（会計年度）

第１６条 本会の会計年度は、毎年１月１日からその年の１２月３１日までとする。

附則 （２０１９年3月３０日）

この会則は２０２０年1月１日から効力を発する。

附則 （２０２１年3月２７日）

この会則は２０２１年3月２７日から効力を発する。

附則 （２０２６年3月２８日）

この会則は２０２６年3月２８日から効力を発する。

第 30 回懇談会（大会）のご案内

マダガスカル研究懇談会第 30 回大会は以下の要領で実施します。

今回は国立民族学博物館での開催です。前回に引き続き、対面とオンライン配信を併用するハイブリッド形式で行います。対面開催では、講演会や総会はもちろん、その後の懇親会にもご参加いただけます。オンラインでは、遠方の方も講演会と総会に参加することができます。大会参加費は対面参加 1,000 円、オンライン参加無料を予定しています。

会員、非会員を問わず、ふるってご参加いただけますようご案内申し上げます。

日時：2027 年 3 月 27 日（土） 13 時 30 分～（開場 13 時 00 分）

対面開催の場所：国立民族学博物館
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園 10-1
URL: https://www.minpaku.ac.jp/information/access
会場等の問い合わせ先：マダガスカル研究懇談会事務局：info@madacom.org
＊国立民族学博物館は万博記念公園の中にあり、公園を利用される場合、入園券（大人 450 円）の購入が必要です。公園を利用されない場合は無料で通行が可能です。通行の手順については、大会が近づいてきたらメーリングリスト等で告知する予定です。ご不明な点などございましたら、事務局までお問合せください。

オンライン開催の場所：

Zoom の URL を共有するために事前の参加申し込みが必要となります。懇談会ウェブサイトにオンライン参加の申し込みフォームを設定しますので、そちらからお申し込みください。懇親会には参加できません。

プログラム：
13:30～ **ご挨拶**
13:40～ **発表 1: 池谷和信**（国立民族学博物館）
14:50～ **発表 2: 米澤隆弘**（広島大学）
16:00～ **総会**
17:00～ **ポスター発表**
17:30～ **懇親会**

大会参加費：対面参加 1,000 円、オンライン参加無料。会員以外の方もご参加いただけます。
懇親会参加費： 3,500 円（予定）

原稿を募集しています

SERASERA は、会員間の交流と情報交換を目的としたニュースレターです。広く会員各位からの原稿（文章／表紙写真）を募集しています。

◆ SERASERA は、2020 年 2 月発行の 42 号から、紙媒体の印刷物ではなく、マダガスカル研究懇談会のホームページ（http://www.madacom.org/news/index.html）上で電子的に公開されています。SERASERA への投稿・寄稿をめぐるご質問等については、電子メールで編集部宛て（edit@madacom.org）にお問い合わせください。

1. 原稿期限
   毎年、原則 5 月 1 日に夏号の編集を、11 月 1 日に冬号の編集を開始します。この日までに、電子メールで編集部まで原稿をお寄せください（edit@madacom.org）。ただし、文章を書きなれていない方の場合には、編集部とのあいだで通常より多くのやりとりをする場合がありますので、上記の期日よりも早めに原稿をお寄せください。
2. 原稿形式
   文章原稿はマイクロソフト社のワード形式で、写真原稿は JPG 形式でお寄せください。
3. 写真原稿
   表紙写真には、撮影者、撮影場所、撮影年（月日）および 100～300 文字の解説文章を添えてください。
4. 編集の手間を軽減するため、表紙写真原稿ではない一般原稿の場合には、できる限り、投稿者自身が文章原稿に写真を貼りこんで整形したワードファイルを作成し、お送りください。
5. 文章原稿
   分量にとくに制限はありませんが、ひとつの記事の長さは、短いもので 2000 文字ていどを目安とします。掲載希望コーナーの名まえと題名、執筆者名と所属をお忘れなく。
   　文章は、予備知識のない人にも内容と意図が理解できるよう、できるかぎりやさしくわかりやすい表現で書いてください。マダガスカル語の語彙や地名、人名をカタカナ表記される場合には、アルファベット表記も添えてください。アルファベット表記がわからない場合は、編集部にご相談ください。生物についての学術的な原稿の場合は、生物名のラテン学名もできるだけ添えてください。
6. 関連写真・図表
   番号と短いタイトル、必要に応じて 2～3 行以下の解説を付してください。ひとつの記事につき、写真と図表あわせて 10 点ていどを上限とします。
7. 記事の出典（リソース）
   自分が直接見聞していない話や、自分が集めたのではない資料については、出典（リソース）を明記してください。また、未確立の学説や根拠薄弱な仮説などが引き合いに出される場合、編集部が根拠や出典などの提示を求めることがあります。引用した文献については、著者名・文献名・

出版年・出版社ないし書誌名・掲載ページ（雑誌論文の場合）などを文献リストとして末尾にまとめておいてください。

8. 文章コメント

わかりやすさと最低限の正確さを期するため、編集部が文章に目をとおして、著者にコメントを連絡いたします。ただし、最終的な文責は寄稿者にありますので、編集部からのコメントに従うか従わないかを適宜判断して、手直しをおこなってください。この作業は、原則一回とします。SERASERA の発行主旨や会の活動目的に合致しない記事と編集部が判断した場合には、掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

9. レイアウトの著者校正

夏号の原稿については 6 月中、冬号の原稿については 12 月中に、レイアウトの著者校正をおこないます。この時点では、ページ数が変わるような大幅な変更ができませんので、8. に関わる手直し時までに、納得のいく文章にしあげてください。著者校正の段階で大幅な加筆訂正をされた場合には、編集部が掲載の延期や中止をお願いする場合があります。

10. 刊行とウェブ公開

夏号は 7 月下旬、冬号は 1 月下旬をめどに電子的に刊行いたします。ただし、編集作業は会員のボランティア作業にもとづいておこなわれていますので、執筆者のみなさまにはその旨よろしくご理解とご協力のほどをお願いいたします。投稿された記事や画像は、マダガスカル研究懇談会のホームページで公開します。

ニュースレター編集方針

- マダガスカル研究懇談会ニュースレターは愛称を「SERASERA」とします。Serasera はマダガスカル語で「交流」を意味し、＜セラセーラ＞と発音します。
- ニュースレターの編集は、世話役と事務局員から構成される編集部によりおこなわれます。
- 編集部員の名前はニュースレター上に開示します。
- ニュースレターは会員からの投稿および編集部が会員と非会員に対し執筆を依頼した原稿を記載し、発行されます。
- 原稿は、会の活動目的に沿う内容とします。
- その上で原稿は、その分野や領域を限定しません。
- 編集部は寄せられた全ての原稿を査読し、その内容が会の活動目的に合致しているかどうか、事実関係についての誤りあるいは文章表現や表記上の誤りや不適切な箇所がないかどうかについて判断いたします。
- 編集部は、執筆者に対し、原稿内容の修正を求めることができます。
- 原稿のニュースレター掲載への最終的判断は、編集部に一任されます。したがって、その内容が不適切であったり、事実関係の修正がなされない場合には、編集部から依頼した原稿であっても、不採用とする場合があります。不採用の理由については、原稿の執筆者に対し編集部から通知いたします。
- SERASERA に掲載された著作物の著作権はすべて著者にあり、著者は SERASERA に掲載された著作物を自由に利用できることとします。ただし著者は、著作物の複製と公衆送信をマダガスカル研究懇談会に許諾したものとみなします。

2026 年度世話役・事務局・編集部・会計監事

【世話役】飯田卓・市野進一郎・蟹江康光・蟹江由紀・佐藤宏樹・高畑由紀夫・水田拓(世話役代表)
・箕浦信勝・森哲・吉田彰

【事務局】大河龍之介・蒲生康重・佐川そのみ・篠村茉璃央・前畑晃也

【編集部】市野進一郎（編集主任）・大河龍之介・篠村茉璃央・前畑晃也・水田拓

【会計監事】杉本星子・平野智巳

マダガスカル研究懇談会 ニュースレター　SERASERA　第 55 号

発行者　マダガスカル研究懇談会

〒606-8511

京都府京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学アフリカ地域研究資料センター内

2026 年 10 月 16 日発行